慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハイデッガーに於ける超越の問題(承前)
Sub Title	Die Konstruktion des Seins aus der Zeitlichkeit : Das Problem der Transzendenz in der Heideggersphilosophie
Author	立野, 清隆(Tateno, Kiyotaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1953
Jtitle	哲學 No.29 (1953. 3) ,p.99- 149
JaLC DOI	
Abstract	Die eigentliche Zeitlichkeit, die durch die Entschliessung der vorlaufenden Entschlossenheit erreichte wurde: d.h. der Dialog des Seins mit dem Nichts erlautert, indem er sich selbst als eine reine, Schemabildliche und selbstaffizierende Anschauung betrachtet, wie die Zeitigung der Zeitlichkeit die raumliche Vorstellung hervorbringen und das Sein im Anblickcharakter konstruieren kann, so dass wir sunachst den Begriff der transzendentalen Dynamik erreichten. Und die fundamentale Ontologie wird als die dialektische Entfaltung einer Anblick-bildlichen transzendentalen Dynamik, die die Zeitlichkeit als solche zeitigt, gefasst; und es zeigt, dass die Zeitigung der reinen selbst-affizierenden und Schema-bildlichen Zeitlichkeit die bildliche Fassung der reinen Idee der Zeitigung als solcher der Zeitlichkeit ist, und da gewinnen wir den Sinn des Daseins, der in die Zeitlichkeit reduziert ist: die Idee des Ek-sistenz. Damit wird das menschliche Seiende als solches von dem Ursprung der Selbster-schaffungen aus, (wir verstehen unter ihr das Werden des geschichtlichen Wesens des Seins) schopferisch wiedergewonnen; und dann zeigt sich zugleich auch die Philosophie der Geschichte des Seing, das systematische Ganz der reinen Erkenntnis, und konstruktiv entfalten wir den Ort des Ek-sistenz, den ek-sistenzlichen Raum, in dem ein menschliches Dasein zur Ek-sistenz wird und sich als Ek-sistenz vollendet, und versuchen wir, indem wir die dem jetzt und hier, stehenden und bleibenden Ich notwendig bestimmende Richtung der Transzendenz scharf erschliessen, die Losung des Grundproblems der Philosophie auf einen Schlag zu geben: wie man zu solch einem werden kann, das ein Mensch eigentlich gewesen ist.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000029-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハイデッガーに於ける超越の問題（承前）

立野清隆

四、時間性よりする存在の構成

（脱我的思惟 Ek-statisches Denken による存在の論理学の展開の試み）

1

先駆的決意性に於ける存在企投の力動的緊張性は、聊かも弛められることは出来ない。力動的に緊張せる存在と無との絶対否定的なる対話を、苛藉なく肯定することによつてのみ、思惟は脱我的に自らを費消無化し、自己費消的にかく無を思惟することの中に於てのみ、思惟は始めて時間性そのものの純粋直観に到達し、之を純粋なる記述へと齎らすことを得るであらう。

此処にあつては思惟は最早や、あり来つた何ものか（存在者）に関する、即ち、存在者をノエマ的対象とする、過去追想的な判断作用ではなくして、過ぎ去れるものを過ぎ去らしめて之を存在者として現象せしめつゝ、今将に来らんとする何ものか（存在）に関する、即ち、不可知的なる先験的対象Xを対象とする、自由企投的なる「自由思惟」そのものであり、かくて存在論的思惟は根源的思惟として、思惟的対象を自ら形成しつゝ之を受容する純粋構想そのものであるであらう。然るに時間の核心的機能はカントも証示する如く、「凡ての表象作用の普遍的形式」（A98）であり、かくて時間性を現存在の先験的原始構造として闡明することが、その儘直ちに、現存在を表象化作用そのものと

して、即ち純粋構想力そのものとして解することを意味する。超越の最奥の本質は純粋構想力に基づき、かくて存在の論理学は、時間性の必然的時熟に従ふ純粋構想力の、自発的な形象化的表象作用そのものとして遂行せられることとなる。今や時間性のかゝる純粋構想的性格が、即ち自ら視象を形成しつゝ之を受容する、時間性の純粋表象化的直観作用が、その具体的なる時熟の仕方に於て捉へられなければならない。

時間は今―系列の純粋継起として不断に流転する。純粋直観が非対象的に直観するのは此の継起であり、然かもかゝる直観とは自己形成者の受容に他ならない。然るに純粋今―系列の純粋直観とは、現前者の単なる受容ではない。何となれば若しさうであるとすれば、純粋直観は、結局その都度の「今の今」das jetzige Jetzt を直観し得るに過ぎず、今―系列そのもの、及びその地平を直観し得ないからである。今がその「たつた今」Soeben と「やがて」Sogleich とに於て、本質上単なる延長を持つに過ぎないとすれば、現前者の受容は、単なる「今」をさへ直観し得ないであらう。純粋直観の受容作用はその Sogleich を先視し、且つその Soeben を再視することによつてのみ、始めて自己内に「今」の視象を与へ得るのである。時間性の純粋直観たる今―系列のかかる視象とは従つて、眼前存在者の単なる受容的視象でもなければ、又経験的なる模象でもなく、かゝる視象や模象の具体的なる可能性の規則の表象たる図式、図式―形象 Schema-Bild であるであらう。図式とは「それに則つて始めて形象が可能となるところの略図」(A 141 B 181)であり、視象 Anblick 創造可能の規則を、その規制の仕方に於て先与するものである。然るに既に表現の規則の表象中に形象可能性が形成せられて居り、後者は又その構造上、図式に属する視象に他ならず、かくて図式は必然的に図式―形象 Schema-Bild であるであらう。「人間の心の深みに於ける隠れたる技術」(A 141 B 180)としてかく図式性は、時間性そのものの根本構造に属して居り、然も時間性が現存在の超越を形成するものである限り、

超越の出来事は、その最深の本質に於て一つの図式性であるであらう。我々に更に進んで時間性の図式-形象を、具体的に規定しなければならない。

即刻を予見しそしてそれの直前へと回想しつゝ（Hin-zu-anf…und Zurück-zu-in…）今此処へと帰り来るといふ意味に於て今の像を与へる、自己触発的な時間性の時間的顕現は然し、その都度それは既に時熟し終へた時間として対自的に自らを有化せしめて、不断に之を「自己より発してそして自己へと帰ること」"Von-sich-aus-hin-zu und Zurück-auf-sich" といふ、根源的な自己指示的視象性格に於て直観することを意味する。かく直観さるべき視象を純粋に自ら形成しつゝ受容する直観を純粋直観と呼び、かゝる自己触発的な純粋視象形成的表象化作用を、純粋構想力と規定して置かう。

純粋図式—形象は、純粋構想力の先験的所産であり、時間性のかゝる図式—形象的純粋直観の中に、時間性は「表現の可能的可表現者」"das mögliche Darstellbare der Darstellung" たる自らの本質性格を呈露するのである。時間とはその根柢に於て「可能的可表現者」そのものであり、時間性の時熟とは従つて、かゝる図式—形象的なる表象化作用の自発的なる遂行そのものを意味する。時間は経験の援助なしに被直観者を自己に関与せしめるものとして、本来自己自身の純粋感触 "das reine Selbst-affektion" である。純粋自己感触的に時間は、脱我的未来的なる「：へと目指し」"Hin-zu-auf…" つゝ、持続的な「への超出」"Heraus-stehen-zu…" を遂行する。然もかゝる本質的な「：への超出」は、Stehen に於て、過去的基底面たる「：へと帰ること」"Zurück-zu-in…" との間に、根源的な抵抗的対立 Dawider を完全に対立せしめ、力動的に緊張せるかゝる対立的拡がりを、「自己より発してそして自己へ帰る」といふ、原本的な自己指示的地平性格に於て形成しつゝ之を自己へと受容的に到来せしめる。対立せしめ

る‥への転向 das entgegenlassende-Zuwendung-zu‥という、時間性の根源的な対立化の作用性格そのものは、自己指示的な直接的視象性に於て現象化せしめられ、図式―形象となるのである。対象の対象的なる所以は、「‥へと目指し」つゝ「‥への超出」を遂行することによつて、過去的基底面たる「‥へと帰ること」との間に、絶対否定的なる抵抗的対立を先行的に統一把持することの中に、此の否定的なる抵抗性の強要を、その全き姿に於て働かしめることに存する。強要的なる此の必然性の統一的把持によつて、一切の遭遇するものが、予め一致性に向つて集約され綜合統一せられるのである。かゝる統一性の先行的且つ恒常的な先保持的表象こそ、カントが正に概念と呼んだところのものの本質なのである。(A 103) 概念は統一性の表象として一つの意識であり、かゝる意識は悟性と呼ばれる。対立化とは原始的概念であり、概念的表象作用が悟性に属する限り、それは悟性の「原始的な働き」である。然も此の「原始的働き」は一つの完結的全体として、合一の仕方の多様を内含してゐるのである。一義的に対立化を遂行するものとして発現する純粋概念のかゝる機能は、全体として気随に抗ふ如き何ものか、即ち統一性を、根源的に表象しつゝ之を自己自らに先与する規則の能力として特徴附けることが出来る。規則の能力とは予め統一性を先保持することによつて、凡ゆる可能的なる表象的合一を導くことを意味する。然も規則は時間性の純粋直観に於ける対立的抵抗性そのものの先保持の中に表象的に形成され、今や対立的抵抗性という根源的な規則は、純粋に視象化せしめられることとなる。悟性概念に於て表象される規則の統一性を形象して之を純粋に可視察的ならしめ、かくて対立化そのことを具体的に可能ならしめる先験的構想力によつて、範疇は始めて範疇として形成されるのである。然も範疇は純粋原始概念なるが故に、先験的図式性は一般に、根源的なる概念形成そのものであるであらう。[註]

然るに「‥を目指して自己から発しそして自己自らへと還帰する」といふ、時間性の根源的図式―形象に於て、「‥

を目指して自己から発する」といふ、時間性の自己触発的な未来的契機の忘却によつて、その超出と還帰との間に形成される非連続的な拡がりの純粋視象、図式—形象が、無時間的連続的に水平化せしめられて、直接的な視象としてのみ、即ち過去面的形象性に於てのみ把捉せられるところに、同語反復的記号的な同一矛盾律的論理といふ、悟性の派生形式が生ずるのである。「自己から発してそして自己へ」といふことが、完結的に既に形成され終へたものとして、最早や絶対に開かれ綜合されることがないといふことが、かゝる同一矛盾律的対象論理の持つ存在論的意味であり、かく時間性の外へと落ち来つて無時間的に妥当する、同一矛盾律的対象論理の非歴史的非創造性が、然しそれにも拘らず不断に、「自己から発して——自己へ」といふ時間的開きに於てのみ現象しなければならず、かくて非歴史的なものも歴史化されなければならないといふことが、ニヒリズムの可能性の根拠である。対立化的なる対象化の過去面的な完結を表現せる対象的存在者とは、「自己より発して自己へと帰ること」、即ち「自己自らから自己を示すこと」といふ、時間性のかゝる独立的完結的な自己指示的発見性を意味するに他ならぬ。完結的に過去—現前的に表象化せられた時間性の此の自律的な根本的指示性格こそ、客観性一般の根源的了解の根拠であり、延いては時間からの空間の独立性の理解の可能根拠であり、更には存在を実体として捉へることへと誘惑する根源的光りなのである。我々の認識的行為が、此の様な根源的光りによつて先行的に捉へられた対象的存在者、実体概念から出発するならば、非歴史的なるものも亦歴史化される時間性の時熟に従ひつゝ存在は茲に、本質存在 essentia 乃至「である存在」と呼ばれる形相的契機と、実存 existentia 乃至「がある存在」と呼ばれる質料的契機との二元に、無時間的無媒介的に分裂せしめられてそこに、抽象的非歴史的な一般的存在者論、形而上学の成立の可能性の地平が開かれるのである。

扨、純粋自己感触的な時間性の時熟は、「‥への超出」そのことによつて、基底面たる「‥への還帰」との間の根

源的対立 Dawiderを、「自己から発して自己へ帰ること」といふ、可能的なる自己指示的視象性格に於て形成した。純粋にかく形成せられた視象は、かく視象化せしめることの規則の表象そのものとして、図式—形象と呼ばれた。観るものなくして観る先験的構想力、時間性の純粋直観たる図式—形象は、視象可能の規則を表象して之を、形成的受容者たる自己へと到来せしめて再認しつゝ、時間性そのものの先験的理念を結実せしめるに至る。かく結実せしめられる原始的概念、時間性の純粋理念こそ、凡ゆる概念的表象を具体的に可能ならしめつゝ、之等を親和的に結合統一する先行的存在理解 Verstehen そのものなのである。

超越の全構造は、自己転向的対立化が然るものとして、対立性一般の地平を先形成するところに存する。然るに今や超越の地平は図式—形象として純粋に視象化せしめられ、理念化せしめられて、超越は自らの具体的なる可能の事実根拠と可能根拠とを獲得し、超越しつゝ自らを完成せしめて行くこととなる。

即刻を予見しそしてそれの直前へと回想しつゝ、今此処の純粋視象を時熟せしめる時間性の図式—形象は、存在と無との対話として形式化せられた根源的時間の「今此処」に於て、根源的時間性をば「存在を得て存在を失ふ存在の全体的拡がり」の純粋視象として形成することになる。然も此の様な視象形成の時熟が、即刻の予見の絶対的不可能性から、直前への回想の絶対的不可能性へと投げ返されつゝ、云はゞ無から無へと無を無する時間性の時熟が、然も尚ほ直接的に視象化せしめられ得る時間性の純粋視象、「自己から発して自己へ」（存在を得て存在を失ふ存在の全体的拡がり）を唯一の有的なる素材として、堆積せる無限の過去的時間と、迫り来る無限の未来的時間とを「今此処」に於て、鉄の必然性もて交互転入媒介せしめる無限の力によつて、現前化的に遂行せられなければならないといふ絶対否定的なる力を構想することの中に、我々は、かゝる図式—形象の展開が、本来先験的力学としてのみ捉へられ得るこ

との必然性を理解するであらう。かくて脱我的思惟による根源的時間性の純粋直観たる先験的構想力の論理は、図式—形象的なる先験的力学となり、図式—形象的なかゝる先験的力学は、現存在の超越を、それが存在者をして存在者たらしめる具体的な可能性に於て展開しつゝ、超越の地平を全体的に略図する、純粋認識の体系的全体となるであらう。

我々はかくて先づ、根源的時間性を根本構造とする現存在を、純粋に図式—形象的に展開することによつて、自己指示的な直接的視象の中から、充全に了解されたる実存の理念を読み取ることを以て、差当つての目標としなければならない。此の様にして獲得された実存の理念は、根源的時間性そのものとして表象的に自らを現象せしめ、かくて具体的なる歴史的世界を再構成的に弁証することによつて、実存の理念の許への現象の包摂といふ形而上学的課題を満しつゝ、「今此処」に於ける現存在の超越を、一義的な鋭さを以てその企投的未来性に於て完成せしめるであらう。

根源的時間性の時熟が、根源的意志の表象の自覚としてそれが空間的表象を産み、存在の意味をかゝる空間化的表象の全体的完成に置き、之を目指して展開を遂げるデイオニユソス的認識意志への自己昇華に就いては、第二節に於て稍〻立ち入つて述べて置いたので、此処ではその反復を避け、直ちに先験的力学そのものの記述を遂行しよう。

註一、人間の有限的認識一般の可能性が、只覚知的、再現的、再認的なる三様態を持つ根源的純粋綜合に於てのみ始めて成立し、かゝる原本的なる綜合を具体的に可能ならしめるものが、先験的構想力たる根源的時間性であることに就いては、Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik 2 Aufl. の一七二頁以降参照。

2

純粋図式—形象的有化作用そのものたる根源的時間性の具体的なる遂行は、自ら形成した純粋視象、純有を、具体的なる事実根拠として出発する。純有は純粋自己感触的な時間性そのものの創造的作用の規則の完結的表象として、

それは、端的に無からの区別に於ける自らを、無からの区別の仕方に於て表象する。然もかく完結的に現象化せられた純有は、同時に自らを絶対無へと費消無化する限りに於てのみ具体的に可能であるといふところに、時間性の絶対否定的な脱我的性格が存して居り、此の脱我的時熟の根本性格を明白なる直観へと齎らし、時間性の純粋理念を獲得することこそ、先験的力学が当面の課題とするところのものに他ならぬ。

存在 das Sein は今や自らを「である存在」essentia として規定することよりも、又「がある存在」existentia として措定することよりも以前に、之等に先行して何よりも先づ自らを「自己から発して自己へと帰る」完結的純粋視象純有 reines Sein として、端的に無 das Nichts から、即ち無を絶対に否定することによつて自らを規定しなければならない。従つてそれはヘーゲルに於けるが如く、無規定なる抽象的普遍の故に、そして無と無差別なるが故に純粋であるのではなく、純有とは、存在は存在であつて無ではないが故に、無の絶対的否定として、無を無化するといふことによつて、端的に形を持てるものでなくてはならない。それは無と無差別なる抽象的普遍ではなくして、形を持つて「今」「そこ」にあるものでなくてはならない。かくて今や存在は純粋に存在として絶対に無を否定し、又無は存在の絶対的否定そのものとして、存在と無とは絶対否定的に対立する具体的なる関聯に引き入れられ、かゝる対立の先保持的表象は存在可能そのものの純粋視象を形成し、存在の全体的現成は具体的視象性に於て遂行され得ることとなる。

無は今や単なる絶対無として an sich に安んじて止まるを得ず、形を持つて「今」「そこ」に存在せんとする有の絶対的否定として、不断に之を、存在を失はしめる無限の方向に、即ちそこからして絶対否定的に、自らを存在として形成し来つた、根拠たる無への方向へと無限に無化せしめる。an sich として在つた、否かくあるとも絶対に言はれなかつた絶対無は、存在との für sich の関係に於て、自らを端的に存在の全体的否定作用そのものとして、自らの本

質を全体的に顕現する。然るに存在を失はしめる此の無限の無化への方向は、形を持つて「今」「そこ」にある、アポロ的有の具体的なる否定の遂行として、それ自身飽く迄も形像的であり、かくて「今」「そこ」からの無限の無への後退として、無への方向は、過去面へと消滅してゆく動的時間的拡がりの無限の象面を形成する。之に対して純粋視象的存在の時熟は無の絶対的否定として、無限の無化への方向（∵へと帰ること）に抗して絶対否定的に、全体的なる存在の方向（∵へと目指すこと）へと無限に自らを像的に開く。それは存在の全体を目指して先駆する創造的認識意志の、無限に企画的なる企投の遂行として、限りなき未来の方向を動的時間的拡がりの象面として構成する。

かくして限りなく存在を得る未来の象面と、限りなく存在を失ふ過去への象面との、相反する二つの無限に動的なる拡がりそのものに依つて、「今」「そこ」に形を持つて無から存在したアポロ的純粋原像（自己より発して自己へと帰る「今」の純粋視象）は、絶対否定的に対立する両象面に完全に引裂かれて、存在を得て存在を失ふ存在の全象面を、明々とアポロ的明るさもて照らしつゝ、「Da」を実存的空間として開くのである。アポロ的個体はかくて自らを完全に無化する。然し乍らそれは飽迄も、絶対的否定作用そのものとして存在を得る未来の方向と、存在を失ふ過去への方向との二象面に亙つて、無限に自らを引き裂きつゝ時間現成 zeitigen する空間化的拡がりの過程そのものであり、決して全時間的顕現たる空間の完全現実態 entelekheia ではなく、純粋なるデュナミス energeia そのもの個体の無化の脱我的遂行そのもの、実存的空間の明るみ行く過程そのもの、総じて存在可能そのものに止まるのである。従つてそれは善のイデアの観想として、絶対矛盾の自己同一を静動一如の静寂裡に於て観じつゝ、「そこ」に停滞する神秘主義的直観とは何の関はりもなく、却つてかゝる観照の絶対的否定として、脱我の脱我的遂行そのものを意味する。次に然し乍ら此の「今」「そこ」の個体を無限の未来と無限の過去とに亙つて引裂く時間的空間化的拡が

りは、「今此処」の必然的なる限定的時熟によつて、宛然時の輪をめぐるが如く、突如として瞬間に於て完成し、「今」「そこ」を明々と実存する実存的空間（純粋視象の可能的全体）として開き了へるのである。然もそれは同時に、実存する実存的空間、現存在の現成として、[註一]余すところなく引裂かれたアポロ的個体の、全体的なる個物者的取り返し（自己自らから自己を示すこと）を意味する。かくして存在を得て存在を失ふ全体的存在の過程的全体は、絶対否定的なる始源的時間の、絶対否定的統一たる「絶対的今」に於て、現存在を現成せしめて完結的に可能ならしめられたのであり、然も此の創造的完成とは、「脱我性の絶対否定的統一」Ausser-sich-an uud für sich selbst たる始源的時間性そのものに対する絶対的否定として、自らの外、始源的時間性の外に、絶対否定的他者として自らと全く同一なる実存する時間性、現存在を、無の深淵を距てて現成せしめたものとして自らの惜しみなき全き無化を意味する。「今」「そこ」にあるアポロ的個体（自己より発して自己へと帰る「今此処」の自己指示的純粋視象）を、絶対否定的に対立する、未来と過去との二象面に亙つて全的に引裂きつゝ、無からの区別に於ける存在の絶対否定的なる統一を、現存在の実存として完成する、始源的時間性の「脱我性の絶対否定的統一そのもの」Aussersich-an uud für sich selbst こそ、存在の全体的開示乃至は善のイデアを可能ならしめる最高の可能性たる善そのもの、Macht たる Vermögen そのものなのである。

然るに始源的時間性の絶対否定的統一たる「絶対的今」は、三重の否定性によつて貫かれてゐる。即ちその第一は上述の如く、企投的なるものとして全体的存在の全体的顕現を目指して、両象面へと拡がり行く実存的空間の絶対否定的なる脱我的現成そのものであり、第二は、両象面へのかゝる脱我的拡がりそのことの完結的逆限定として、絶対否定的に個体的なるアポロ的純粋原像へと帰ること（今、今の必然的なる時間的時熟）であり、第三は、此の積極的

消極的両意味に解される絶対的否定性そのものの、絶対否定的統一として「今」「此処」(jetzt und hier)に、実存する実存的空間を自らの外、即ち始源的時間性そのものの外に脱我的に産出して、その全き「脱我的否定的統一」Aussersich-an und für sich selbst を完成する。現存在の本質はその実存に存し、実存の本質は「脱我的否定的統一」たる時間性の絶対的なる自己否定性に存する。

始源的時間性は、存在を得て存在を失ふ存在の全体の、脱我的拡がりとしての実存的空間、善のイデアの持つ明るさの大観照たる、神祕主義的体験に停滞することなく、苛籍なく自己否定的に、実存的空間、善のイデアの持つ全体的存在可能を全的に遂行しつゝ、その完全現実態を、実存する全体的存在可能、現存在に於て創造し了へたのである。かくて現存在の実存と始源的時間性とは、絶対否定的に絶対の無に依つて断絶しつゝ、而も全く同一なる根源的時間性、全体的存在可能そのものとして、両者は絶対の非連続の連続の関係に立つ。かくの如き存在史的な本質現成を遂げた現存在の根本構造は如何なるものであらうか。

実存とはその第一の意味に従へば「脱我性の絶対否定的統一」として、始源的時間性の持つエクスターゼ Ekstase の外に立つといふ意味であり、無の絶対的自己否定に依つて生起した始源的時間性は、全体的存在を自己否定的に原本的に現成せしめ、更にその完成の為に自らは無へと後退して、最早や否定性そのものともいふべき自己の如何なる脱我的否定的創造力をも、此の Ekstase の外に立つ実存に対して及ぼし得ず、現存在はその実存と共に、始源的時間性の外に投げ出されて全く自由である。かくて現存在とは無なる神の世界企画ともいふべき、始源的時間性に基づく、存在の存在史的本質現成として、それ自身完結せる一個の体系であり、「今」「そこ」に個的に実存せしめられた贈物 Geschenk であり、運命 Geschick であり、無限なる否定的力 Macht に依つて無から創造せられ来つたもの

として、疑ふ余地もなき被造物 ens creatum である。併し同時に、創造の神たる彼、始源的時間（自己より発して自己へと帰る図式形象的なるアポロ的原像）は、自らを惜しみなく費消展開して、自己の外に絶対に自己を否定して立ち得る現存在に於て、存在の全体的企画を完成するや、之を自己の時間性の外に突き放して実存せしめ、創造の歓喜に陶酔する聊かの瞬間をも持たず、自らの創造能力の全体と、その存在理由の一切とを忽ちに喪失して無へと後退し、自らの最高の死を死せるものとして正に ohne Gott である。現存在の実存とはかくて徹頭徹尾被投的なるものであり、その実存と共に常に既に、無なる根拠を持つ自らの奇異なる存在を関心すべく運命附けられてゐる。自己自らの被投性 Geworfenheit に対する実存のかゝる関心 Sorge とは何であるのか。かく問ひつゝ我々は現存在の第二の規定、即ちその実存的空間性を考察しよう。

現存在とは始源的時間性に於ける実存的空間の全的なる開示と共に、脱我的否定的に創造せられた実存する実存的空間として、自らの本質的構成要素として実存の全体的存在可能たる実存的空間を持つ。「人間に於ける自然の光 lumen naturale といふ存在者的教訓的な言葉は、此の存在者が自己の Da といふ様相で存在してゐることの、実存論的存在論的機構を意味するに他ならぬ。……現存在は自らの Da を始めから持つて居り、Da の欠如してゐる現存在は事実的に存在しないばかりでなく、（本質的に言つて）それは一般に現存在といふ本質を持つ存在者ではあり得ない。現存在は自己の開示性である Dasein ist seiner Erschlossenheit.」[註二]。かくて現存在とは、開かれ行く実存的空間の「そこ」Da から逆限定的に帰り来るや、根拠の無によつて再び絶対否定的に押し返され、不断に「今、此処」へと自己還帰的に落ち来つて、その都度自己の実存であり、現存在は自己の実存的空間によつて隅々迄も打ち開かれ、かく打ち開かれつゝ存在の光 Da を自己の開示性（関心）とすることによつて、即ち認識者として自らを決定す

ることによつて、現存在はその被投的なる Da-sein たることに堪へてゐる。[註三]「存在の光の中に立つこと、それを私は人間の実存と名附ける。[註四]」「Da の此の存在、そして之のみが実存 Ek-sistez の、即ち存在の真理の中で、脱我的に内的に立つことの根本特質を持つ。[註五]」現存在は実存する限りその都度既に、後退しつゝある始源的時間性そのものの絶対的否定性に依つて制約せられ、かくてその実存の事実性に関して言へば被投的である。然し同時に実存は、実存的空間 Da から絶対否定的に帰り来つて根拠たる無に依つて打ち突けられ、エクスタテイツシユに自らの実存を自らのものとして受取るべく実存せるものとして、不断の常自己性 Jemeinigkeit に依つて貫かれて居り、かくて現存在は始源的時間性のエクスターゼの外に立つと共に、それ自身 ekstatisch なるものとして存在の真理の中に、脱我的内的に立つてゐるのである。実存の此の循環構造は如何に統一せらるべきであらうか。かゝる問ひに答へることに依つて我々は、実存の全き理念を獲得することとなる。然しその解答は既に与へられてゐる。

始源的時間性を根本構造とする存在の絶対弁証法は、存在を得て存在を失ふ具体的なる個物者の歴史法則として、法則それ自体も亦只一回の完結せる形態を取り、全体的なる存在の創造的企画の遂行を、「絶対的今」に於ける現存在に於て、絶対の非連続の連続として達成し、自己否定的に無へと後退することに依つて、現存在を完成せる存在の体系として実存せしめたことは先に述べた。存在が存在としてその全体性に於て顕現する唯一の仕方は、始源的時間性に於ける脱我性の絶対否定的統一たる「絶対的今」の真理としてであり、従つて「絶対的今」は本来、存在の全体を完全現実態として完成し了へる時間でなくてはならない。然るに無なる神が、始源的時間性の絶対否定的統一として現存在を完成せしめ得た瞬間なるものは、神の自発的なる死（存在の可能的全体の完結的表象と共に終焉する表象化作用そのもの）によつても、未だ本来の意味での「絶対的今」とは遥かに懸け隔てるものである。何故ならば始

源的時間性たる神は只、自らの時間性の外に絶対に自己を否定して独立的に存在し得る実存を、又自らの創造原理と全く等しき存在原理を持つて、全体的存在可能として存在し得る現存在を創造し得たのみであつて、存在の全体の完全現実態たることを要求する「絶対的今」は、純粋なる可能性として未だ全く未完成の儘に止まつてゐるのである。先に述べた「絶対的今」に於ける存在の全体的充実は、全体的存在可能の可能的顕現、純粋なるデユナミスに止まつたのである。今やデイオニユソス的認識意志たる始源的時間性、神の目指した存在の全体が、全体的に顕現され、創造せられ得んが為には、創造されたもの自らによる無なる神の創造意志の直接の証しがなければならない。現存在自らによつて自己実存が、始源的時間性の外に絶対に之を否定して立つことが、従つて又自己自らが存在の全体的企画の遂行者たることが弁証せられなければならない。現存在自らに依る自己実存の決定が、始源的時間性たる神に対する逆限定として遂行せられなければならない。「絶対的今」の完全なる現成は実存の自由に委ねられてゐる。「実存は真理の運命の只中に存在する」[註六]。然らば現存在の自由に委ねられたかゝる弁証とは具体的に何であり、そして何時生起し又如何に完了するのであらうか。それは現存在が神の死を全的に確認しつゝ、自己自らをデイオニユソス的認識意志として取返す瞬間に於て生起し、かく全的に取り返された自己を惜しみなく費消して、自己の実存を絶対に否定して自己の外に立つ他の現存在を現成せしめ、かくて自らの最高の死を死する正にその瞬間に於て完了する。即ちそれは、被投性に委ねられた現存在の実存を、自己の Da から自己還帰的に帰り来ることに依つて、始源的時間性の絶対否定的統一としての「絶対的今」に於ける「此処」を、存在を得て存在を失ふ存在の全体的顕現として「自我」の個有の全体的永恒的なる存在の拡がりに依つて満しつゝ、存在の全体を可能ならしめるかゝる自己として、曾てあつたし将来もあるべく「絶対的今」に於て取り返し、かくて自己を飽くなきデイオニユソス的認識意志、全体的存在

可能そのものとして全的に肯定しつゝ、神死せり Got ist tot を沈黙的に引受ける、夫の超越の根源的生起の瞬間に於てである。超越の生起と神の死と実存の現成とは、絶対否定的に、根源的時間性たるデイオニユソス的認識意志を構成して三位一体である。かくて自らをデイオニユソス的認識意志として取返した現存在は、かく取り返された自己存在の永恒的全拡がりを、惜しみなく之を、永恒に失はしむる方向へと全くの無目的性を以て無化費消し、絶対に自己実存を否定して自己の外に立ち、無底の底から存在の全体を目指して実存し得る他の現存在を、絶対否定的に創造することに依つて自己を黙殺せしめ、かくてデイオニユソス的認識意志の死復活を現実的歴史世界に於て弁証しつゝ、誇らかにアポロ我を撃ちぬを叫んで自らの最高の死を死する正にその瞬間に於て完結する。即ち茲に神の死と自己実存の死との間の神なき歴史的滞留の夜、乏しき時間は、神の死を弁証するデイオニユソス的認識意志の遂行その ものに依つて、存在の永恒的拡がりを全的に得て、之を永劫に向つて全く失はしめる時間性の絶対否定的全体の全的なる顕現として、an und für sich なる永劫的拡がりの全体、絶対的永劫の光りを以て、眼くらめく真昼 Mittag として照明しつゝ、「絶対的今」を完全現実態として完成する。

以上に於て我々は存在の至純なる時間的現成を遂行しつゝ、実存の根本構造として開示性の属することを開明すると共に、現存在の実存の全き理念を、被投的投企 geworfendes Entwurf といふ矛盾的循環構造を持つ開示性を、全的に展開することによつて存在史的構成的に達成し得た。かゝる実存の理念は、現存在の歴史的滞留そのことに於て、事実的に実証せられ顕現せられなければならぬ。換言すれば、此の実存の理念は、存在史的本質現成に従つて、現存在に於ける最大の試練、底ひなき頽落、ニヒリズムの歴史に於て、最高の完成が事実的に達成せられなければならない。我々は然しその前にかくの如くにして到達された実存の理念、乃至は時間性の根本構造が、現存在の実存学

的分析学によつて獲得せられた諸成果を、充全に満し得るものなることを呈示して、その概念的把捉をより明確ならしめんが為に、論述を暫らく停滞せしめることとしよう。

「存在の意味の問題の具体的完成」を目指して企画された「存在と時間」は、存在一般の意味が開示される地平を、存在を言ひ又言はねばならぬ唯一の存在者たる現存在の、曖昧化され中和化せられた頽落的存在企画を全的に押し進めて、「ある」と言ふことをすら全く沈黙せしめる限界状況、即ち「了解的に全的に企画された死への存在」に於て、自らを存在現成の全運命を担ふ「負目存在」Schuldigsein たることを自覚せしめ、存在を全く無から決断的に企画せんとする先駆的決意性の時間的時熟として達成した。即ちそこでは、「すべての存在了解一般を可能にする地平たる時間性」は、「現存在の本来的な最も鋭い単独化」への沈然的決意に於て、存在一般の意味を問ふことの意味に対する解答として与へられたのである。

「先駆的決意性は現存在を、その本質的な負目存在に於て理解する。此の理解は負目存在を実存しつゝ引受け、かくて無性 Nichtigkeit の被投的根拠として存在することを意味する。被投性 Geworfenheit を引受けることは併し、現存在が、常に既にあつた如く、被投性の中で本来的に存在することを意味する。被投性を引受けることは然し、将来的な現存在が、その最も本来的な〝常に既にあつた如く〟即ちその既存 Gewesen であり得る場合にのみ可能である。要するに現存在が単に、私があり来つたものとして als ich bin-gewesen 存在する丈で、もう現存在は還り来る zurück-kommen といふやうに、将来的に自己自らの上に到来することが出来る。現存在は本来的に将来的であり、本来的に将来的であつたのである。最も極端な、最も本来的な可能性への先駆は、最も本源的な既存への了解的な還帰である。現存在は将来的である限りに於てのみ、本来的に既存であり得る。既存性 Gewesenheit は将来

の一定の様相の中で生ずる」。「将来的に自己へと還帰しつゝ決意性は、現前的に gegenwärtig 情況の中へと自らを引き渡す。既存的な（より適切には既存しつゝある）将来が現在を引き起す場合、既存性は将来から生ずる。此のやうに、既存的現在的将来として統一された現象を、我々は時間性と名附ける。現存在は時間性として規定される限りに於てのみ、先駆的決意性といふ、上述の本来的なる全体存在可能を、彼自らに対して可能ならしめる。時間性は本来的関心の意味として呈露せられる」。かくて「時間性は一般に如何なる存在者でもない。時間性は存在するのではなくて時熟 sich zeitigen するのである。……時間性は時熟する。而も彼自らの可能なる様相を時熟する。かゝる様相は、現存在の存在様態の多様性を、就中本来的及び非本来的実存の根本的可能性を可能にする」。「時間性は根源的に、脱我性の絶対否定的統一そのもの（Ausser.-sich-an und für sich selbst）である。それ故我々は、将来、過去、現在と特徴附けられたる現象を夫々、時間性のエクスターゼと呼ぶ。時間性は、先づ自己から（自己原因的に）抜け出て来るところの曽ての一存在者ではなくて、その本質はエクスターゼの統一の中での時熟である」。「根源的本来的な時間性の根本現象は将来である……関心は死への存在である。我々は先駆的決意性を、現存在の端的なる不可能性と特性附けられたる可能性への、本来的存在として規定した。終りへのかゝる存在の中で現存在は、死の中へと投げ出されて存在することの出来る存在者として、本来的全体的に実存する。現存在は、そこに於て単に終つて了ふ終局を持つのではなくて、有限的に実存する。先駆的決意性の意味を構成する時間性が、最初に時熟する本来的な将来は、それと共に有限的として明らかになる」。「有限性は元々終ることを意味せずして、時熟そのものの性格を意味する」。「根源的時間性の今迄の分析を、我々は次の命題に総括する。即ち、時間性は根源的に時間性の時熟であり、かゝるものとして時間性は、関心構造の構成を可能にする。時間性は本質的に脱我的である。時間性は根源的に

将来から時熟する。根源的時間は有限的である」[註七]。

「存在と時間」に於て達成せられた時間性の根本構造は、以上に於て概観せられた。日常我々が解してゐる、無始無終の通俗的時間が、根源的時間のかゝるエクスタテイツシユな性格が、「今の連続」としての時間に水平化されることに依つて成り立ち、此の水平化自身は、それ自身本来的時間性の時熟に基づいて居り、それ故にこそ非本来的時間性が、根源的時間性を時熟し得るものなることが明らかにせられなければならない。それと同時に、一般に自己性が時間性の構造に帰せられ、本源的なる自己の恒常性が根源的時間の時熟として明らかにせられた今、無自己の恒常性が、非本来的時間性の時熟として展開せられなければならない。かくて我々は頽落 Verfallenheit の存在史的現成を、具体的に遂行することとなる。

3

存在を得て存在を失ふ存在の全体的顕現たる実存的空間の、個体化的逆限定によつて、始源的時間性の外に投げ出されて完成的に実存せしめられた現存在は、併し同時に自らの実存を、開かれゆく実存的空間を絶対に否定しつゝ、不断の個体化的自己還帰を遂行することに依つてのみ之を、既にあり来つた自己の実存として、現前的にその被投性に於て取り返す。此の様にして取り返された被投的なる現存在の自己性は、将来的既存的なる現在に於て時間的に時熟し、それは存在を得て存在を失ふ両次元への無限の開きに対する絶対否定的なる反抗として、個体的自己の絶対的固持への意志である。

我々は曩に始源的時間性の構成的三象面を、夫々のエクスターゼ Ekstase として特徴附けた。実存的空間とは、

存在を得て存在を失ふ存在の全体的開きの可能性を、将来と過去との両象面に亘つて全体的に企投する、脱我的開きの脱我的遂行そのものであり、従つてかゝる脱我的遂行の否定によつて現成する個的自己の固持への意志とは、氾濫的に存在の全体を目指して自らを惜しみなく費消する、デイオニユソス的認識意志に対する反抗的拒否たるのみならず、同時にかゝる拒否と共に時熟する脱我的開きの滞留、恍惚的脱我性の観照的固持への意志でもある。かくして脱我性の否定的統一として現成した現存在の歴史的滞留は、恍惚的脱我の神秘的美的直観と共に、個別的なる主体的自己への意志となつて現成する。an sich（被投的事実性）に於ける現存在の至純なる自己開示は、実存の時間的現成の必然的性格に依つて制約せられ、此処にデイオニユソス的認識意志は、現存在に於て、神秘主義的直観裡に陶酔的 ekstatisch 自我の恒常性（非本来的自己の恒常性）への意志に転じ、脱魂の脱我的状態に在つて負目ある自己の自己性（脱我の脱我的遂行そのものたるデイオニユソス的自己）を全く喪失し、陶酔の過剰に倦怠しつゝ、益々増大し行く創造するものなき自己分割、歴史的性格の飽くなき去勢の企投によつて、空しく自ら消耗するニヒリズムの歴史が始まるのである。神秘主義的直観とは実に、始源的時間性の外に投げ出されて実存する現存在が、その第一次的なる実存の取り返しに於て、壮大な存在全体の大観照に忽ち自らを喪失して、過去的に之を「ある」と名附け、かくて存在の全象面に亘つて止まることなく、脱我的開きを脱我的に遂行する（此の二重の絶対否定的脱我によつて、非歴史的恍惚的なる自己喪失としての脱我は消滅する）現存在の、デイオニユソス的本質の忘却の原体験として、現存在の頽落 Verfallen ニヒリズムそのものの始源を形成する。

デイオニユソス的認識意志は、存在の全体的顕現を、かゝる頽落的実存からの本来的実存の取り返しによつて、自らを非連続の連続として全体的に証しつゝ達成せんが為に、時間性の時熟に従つて自らを深く、ニヒリズムそのもの

の中へと没落せしめる。ニヒリズムの歴史は存在の本質的なる歴史現成に対して構成的であり、不可欠なる必然的過程となる。

自らは個体として実存しつゝ、不断に実存的空間の個的限定に依つて否定的に実存する現存在は、その限りに於て常に未完結なる個体として、不断に「未だない」das Noch-nicht に依つて貫かれてゐることを意味すると共に、それ故にこそ逆限定的個体化の可能性そのものとして、その事実的遂行の可能根拠を、被投的投企たる自己の事実的なる実存性、即ち今、そこに開かれて実存する実存的空間に於て持つ。今や然し存在の全体的企投の事実的可能の根拠を構成する、被投性に於ける現存在の事実性が、存在史的に具体的に展開せられなければならない。

存在の全体を目指す将来的企投的なる開示性（現存在の歴史的滞留と共に、個的に開かれ了つた実存的空間 Da）の完結的遂行として、絶対否定的に此処へと帰り来ることに依つて時熟しつゝ、自己の実存をその事実性に於て発顕する現存在が、自らを既に「此処に」あり来つた自己の実存として、即ちかくあらしめつゝ発顕する作用的自己たる開示性そのものを、自己の実存であつて同時に自己の実存であらぬ、あり来つた被投的自己として、個的限定的に取り返すや否や、かゝる an und für sich なる自己実存全体の現前化的発顕は、その儘直ちに、かゝる発顕を遂行する企投的なる自己実存全体の肯定として、an und für sich に現前化する実存（Gewissheit に於て慥められる Wahrheit）、即ち an sich なる実存の全体の企投的意志となるのである。自己より発しそして自己還帰的に自己へと帰ることの中に発顕された自己実存は、被投的なる個的自己として、実存の自己性と無自己性とが、開かれゆく Da の明るみの中で、観る自己と観られ得る自己として絶対否定的に対立しつゝ、観ることの企画の遂行のうちに於て（Da の個的限定たる反省的思惟の反省的遂行そのもの）、絶対に矛盾する両者は、開き了へた Da の個的限定として、絶対

に同一なる「あれも、これも」として肯定的に統一せられると共に、かゝる反省的観照そのことが、既に為され来つた企画として将来的企投的に、自体性 an sich に於ける実存の全体は決定的に肯定せられるのである。自己反省的実存のかゝる存在論的決定と共に、自我に於ける無限の反省は具体的に可能となるのであり、従つて此処に決定せられた観ることの企画とは、無限の反省可能を先取することによつて、自己を反省的実存として決定する絶対的反省を意味する。絶対的反省とは単に反省された反省を意味せず（如何に内的経験に於ける反省の反復を通しても、それは只かゝる反省の可能の事実を前提するのみであつて、決して自ら反省する反省そのものの存在の絶対的明証には達することが出来ない）、むしろかゝる反省そのことを具体的に可能ならしめると共に、更に自らは、あり来つた自己実存の存在史的追想であり、同時にその肯定として、かゝる追想的なる絶対的反省の具体的なる企投である。従つて現存在に於ける観ることの企画とは、開きの逆限定として、開かれゆく Da の可能性の拒絶たる被投的なる事実的 Da（悟性的思惟）への過去的転落であると共に、それは既に開かれ了つた現存在の実存に於ける拒絶として、自己の被投的なる完成に酔ひつゝ、創造的企投的なる自己費消に対する拒否であり、同時にかゝる拒否の企画であり、総じて実存が一つの橋であり、過程であつて目的ではないことの、不断に没落を通して高揚する有限存在たることの否定として、開かれ了へたる有限的なる Da の歴史的滞留の固持への意志であり、より包括的に、非歴史的なる神秘主義的直観の不当なる歴史的企投（追想的に前提せる仮構存在の未来的存在化）を意味する。

今や現存在はあり来つた自己実存を、その被投的なる自体性に引き渡し、将来的、企投的に取り返された自己と、被投的なる自己存在（実存の事実性）とは、志向性の志向的体験とも云ふべき観ることの企画の遂行のうちに於て、絶対矛盾の自己同一として開示せられ、「自己より発して自己へ帰る」といふかゝる企画的な開示の明るみの中に、

その an und für sich なる全体的自我（観ること一般の全体的可能）は包括者的世界として現前的に取り返され、同語反復的自己として「今」「此処」に全くの自明的なる近さに於て、恒常性を以て措定せられるのである。絶対の非連続の連続として、弁証法そのものが自らを否定して死復活を遂げ、かくて本源的なる歴史的交替と、存在の全体的顕現とを同時に可能ならしめるところの、脱我性の絶対否定的統一たる根源的時間性は、現存在の実存と共に有的に自己限定を遂げて（無の絶対的否定として）、反省的弁証法を時熟せしめ、絶対弁証法の内部に於ける存在者相互間の否定的対立として、観られ得る近さに迄相対化せられ、更に観ることの企画の完成として、かゝる了解は解釈的実践的に遂行せられて、形而上学の全歴史と、従つて又今日に至る迄の人類の全歴史とを具体的に形成し来つたのである。「可能性の中へ投げ入れられてゐる現存在が、その可能性の上へ自らを企投する場合に於てのみ、現存在は此の被投的な根拠である。自己自らの根拠を此のように企投的に置かなければならない自己は、此の根拠を決して自由に支配することは出来ないにも拘らず、実存しつゝ根拠存在たることを引受けなければならない」[註八]。アリストテレスは存在論の体系の建設的企投のうちに在つて、此のような根拠を「思惟の思惟」として見出し、デカルトは絶対的反省の懐疑の只中に於て、かゝる反省的懐疑自体の根拠を、cogito, ergo sum として即ち res cogitans として規定することを余儀なくせしめられたのである。反省的投企それ自体が既に、「我あり」の在り方たる、反省的実存の自体性に基づいてゐるのであり、従つてすべての反省の遂行は勿論、それに基づく企投的実践は、あり来つたもの即ち自己自らから自己を示す自己指示的完結的視象を、現前化的に観照すべく企投するものとして必然的に分析的反復的であり、創造することなき過去への追想的仮構に止まり、決して此の被投的根拠たる既存性そのものにまでは達することは出来ない。ヘーゲルはカントの第一批判を更に徹底せしめ、反省的思惟そのものを全体的に捉へて之をその積極性

に於て打貫き、自体性に委ねられた実存の、観ることの全体的企画の遂行を完成せしめて、あり来つた自己陶酔的現存在の具体的なる歴史法則としたのである。

絶対否定的に「今」「此処」へと実存的空間（可能存在へと開かれた個物者）を、イデア的に開いて被投的企投的に実存する現存在は、それ自身不断に実存的空間から、絶対否定的逆限定的に還帰することに依つて、「今、此処」を可能ならしめつゝ実存するものとして、個物者（自己より発して自己へと帰ること即ち自己自らから自己を示すこと）の可能性そのものである。現存在とは開かれゆく明るみに於て、又明るみの中で遂行される、存在の全体的企投そのものとして、その企投の事実的根拠を、永恒的存在の拡がりの、自明的なる近さに於て取り返された、自己の「今」「此処」なる実存の事実性（被投的投企たる）、視ることの過去現前的企投に於て持つ。かくて存在を得て存在を失ふ存在の全体は、「今」「そこ」に明るんで開く実存的空間の絶対否定的後退に於て、自己還帰的に限定せられて現存在の実存と共に全体的なる個体の現象として、多なる「今」「此処」に現前せしめられる。現象 Erscheinung とは、存在を得て存在を失ふ存在の全体の、全体的顕現の唯一の仕方であり、実存的空間の個物化的時熟に基いてそれは端的に、他者との相互否定的関係に於て立つ、独立的存在者、個物者の様相を取る。現存在の実存と共に今や存在の全体は、実存の根源的時間性に基づいて、個物的多の相互絶対的否定の関係の中に自らを顕現して、生滅的交替の歴史的存在性格を呈するに至る。現存在とは、時間性のエクスターゼの絶対否定的統一の外に立ちつゝ、絶対否定的に個として実存することの企画の内にあつて、存在者として被投的なる事実性に委ねられた自己実存の外に、かく現前化的に捉へられた存在者としての「我」と、絶対否定的対立に於て立つ、個物的存在者を現象せしめて実存する対象性一般、超越の地平に他ならぬ。かくて個物的存在者相互間の否定的対立は、先取された自我の永恒的拡がり（存

在を得て存在を失ふ存在の全体的視象）の超越の地平の持つ明るみの中に於て企画せられることとなる。先に我々が、根源的時間性の持つ絶対否定的関係が、観られうる近さに迄相対化せられたと述べたのは、自体性に委ねられた実存が、それ自身一つの完結せる自己指示的視象、存在者として、多なる存在者の只中に立ちつゝ、相互否定的なかゝる存在の仕方を、企投的に理解してゐることを意味したのである。

然るに現前し来る存在者は、個物的存在可能そのものの全体的顕現として、存在の全体は個物的多の全体となり、一は他を伴ひ来り、一は他を去らしめつゝ、此処に存在史的現成の偶発的由来（「今」の限定たる）に基づく、存在の領域画定的なる類として、種としての個物化をも同時に可能ならしめ、かくてその最高の個物的類とは、既に開き了へたるものとして、開かれ行くことを絶対的に拒絶して堅く自らを閉す、全体的に完成せる世界としての大地であり、更にかゝる有的なる絶対的に閉されたる世界をも越えて、個物の現前と共に背後に引き退きつゝ、存在物の只中 Mitte を明るましめて、之等を存在によつて可能ならしめられたる存在者として、自らを包み隠しつゝ告知する、絶対的に開かれたる地帯（存在全体の純粋視象）、滞留する Da であり、全宇宙的空間そのものたる存在の光である。大地 Erde は完成せる個物者の全体として絶対的に過ぎ去れる世界の全体であり、完全に開き了へたる存在の全体として、かく完成せられた存在の開きを、堅く自らの中に閉して最早や絶対に開かれることなく、千古の祕密を保持しつゝ、開きの絶対的拒否のうちにあつて、自ら閉ざされたる無であらうとする意志である。之に対して滞留する Da とは、開きの一義的なる遂行によつて一切の個物的存在者を、従つて又絶対に過ぎ去れる世界としての大地（反省的思惟に対しては常に existentia として現前する）をも、不断に開きの完成として自己還帰的に過ぎ去らしめつゝ（絶対的自己否定に依る自己完成）、世界をその被投的なる存在者性に於て可能ならしめ、自らは然し絶対的否定性その

ものとして、自己のかゝるその都度の完成をも惜しみなく否定して、更に彼処高きへと馳せ行きつゝ、愈々深く且つ堅く、大地の秘密を「此処」へと帰り来つて固持しつゝ滞留する、絶対に未だ来らざる、不断に未完結的なる、今将に来らんとする世界である。自体的実存の反省的取り返しと共に将来する、かゝる理念的企投的なる世界は、それ自身不断の未完結性 das Noch-nicht に依つて貫かれたるものとして有限的であり、絶対の無制約的全体を目指して自らを惜しみなく打ち開きつゝ、その都度常に打ち砕かれて、あり来つた自己の堅く閉ざされたる根拠、大地へと投げ返され、多なる「今なる此処」に自らの漂泊的帰郷の記念碑的道標として、分節的に個物者を現象せしめ、その閉ざされたる大地の個物者性（開きの拒否としての絶対的抵抗性）を、歪められざる全体性に於て保持しつゝ明るましめて、之を更に無制約的全体的なる存在の開きへと向つて聳立たしめるところの、夫の凡ゆる現象の総括として自らも亦現象し、自己否定的に高みへと開いて滞留する、現象の下に於ける無制約的全体者、宇宙的空間なのである。カントは此の宇宙的空間の持つところの個物者的綜合の諸制約が、無制約者へと向つて上昇しゆく系列の至純なる自己否定的指示像を、反省的に超越論的理想 das transzendentale Ideal と呼んだのである。個物的存在可能そのものの極限に於て、後退も開き了へもせず、従つて自らは如何なる存在者でもなく、却つて一切の開かれたる存在者を存在者として明らめつゝ、更に高きへと das Noch-nicht に開いて停滞する開かれたる地帯 Da は、純なる清朗へと明るむ宇宙的空間の飄乎たる歴史的滞留であり、正しくツアラトウストラの直観する世界時間として、「万物の上に懸る偶然の天、無垢の天、偶発の天、奔放の天」である。

かくて現存在の実存と共に、具体的全体的に現前する世界とは、過ぎ去れる世界として絶対的に閉ざされたる大地と、未だ来らざる世界として、閉ざされたる世界、大地を全体的に打ち開きつゝある宇宙的空間との、同時的現前で

あり、両者は絶対否定的なる対立的抗争のうちに在つて世界する。Welt ist nie, sondern weltet. 閉ざされたるもの一切を、全的に打ち開かうとする宇宙的空間に対して、大地は、かゝる開きの絶対的拒否のうちに止まつて一切であらうとする。宇宙的空間と大地とのかゝる世界構成的抗争を、我々は存在の原闘争 Urstreit[註九] と名附けよう。現存在は、常に大地と宇宙的空間との間、既に過ぎ去れる世界と、未だ来らざる世界との、時間の最も乏しき只中 Mitte に在つて、現在をその絶対的無性に於て保持しつゝ、絶対に閉ざされたる大地を、絶対に打ち開けた天空に向つて、厳しく否定的な明るさもて之を聳立たしめ、かくて原闘争をその仮藉なき一義性に於て遂行し、自ら世界しつゝ実存する。「現存在の無に於て、始めて全体に於ける存在者は、その本来の可能性に従つて、即ち有限的な様式に於て自己自らに到達する」[註十]。かくして無なる世界は、大地と宇宙的空間との対立的抗争の場となり、存在のかゝる原闘争のうちに在つて大地はその最も堅く閉ざされたるもの、端的に受け入れざるを得ないもの、その祕密を祕密として保持しつゝ承認せざるを得ないものを、かゝるものとして、絶対的明るさの前に露呈し、此の大地の堅き隠蔽は、その儘直ちに自己止揚的に、存在の絶対的開きへの飽くなき意志として、不可避的なる必然的明るさを以て、彼処天空より我々に向つて迫り来り、自らの世界企投の根拠として、之を実存の根抵へと打ち据える。我々は之を存在史的に全的に了解されたる現存在の運命 Schicksal と呼んで置く。

かくの如くにして自らの根拠を把持して被投的企投的に実存するに至つた現存在が、反省的に即ち反省的企投によつて、その被投性に於ける自己実存を、現前化的発顕的に取り返すや否や、現存在の事実的実存と共に自己否定的に「そこ」に現前し来る世界、即ち不断に今一つの世界を過ぎ去らしめつゝある限りに於て、今将に来らんとする世界も亦、存在の原闘争の只中に在つて世界するその歴史的世界性格を忘却的に水平化して、現前化的統一的に存在の原

闘争を終焉せしめ、絶対的明証さに輝いて現前する、an und für sich なる存在の全体的拡がりに自己を喪失して、之を既にあり来つたものとして「今」「そこ」に（一切の「今なる此処」の先取としての「そこ」Da）、最高の必然性を以てあるもの、ありてあるものと名附けて措定する（新なる今の時熟によつて開きは完成して過去的となる）。かくて現存在は、Da の明るみの中に、明るさそのものとして永恒性へと拡がりゆく宇宙的空間を、その超越論的理想性格に於てではなく、即ち不断の自己超克性のそれに於てではなしに、自己喪失的に、観られ得る根源的時間性、終熄せる原闘争に於て之を、世界時間として現前的に把持し終へる。宇宙的空間の脱我的なる時間性こそ、時間からの空間の独立を理解せしめる。世界時間とは、自体性に委ねられた現存在の被投的なる実存と、多なる存在者の自己指示的全体とを同時に可能ならしめつゝ自らは、絶対否定的後退的に、「今」の先行的全体的先取、宇宙的空間として彼処高みへと開き了へたる、明るき地帯そのものであり、昼夜の交替と四季の転変とを、又一切の存在者の歴史的滞留とその消滅とを、現前化的に時熟せしめる。「実存する現存在が、そこに於て自らを企投的に了解してゐるところのものは、現存在の事実的実存と共に「そこ」Da にある。「……現存在は実存しつゝ自らの世界である」[註十一]。「実存しつゝ現存在は世界と同一の超越を持つ」。世界とは、現存在の被投的なる実存の外に、多なる存在者を対立せしめると共に、直ちに之を世界内部的なる存在者として、自らの明るさの中に引入れつゝ現象せしめ、被投的なる実存（存在者的なる主体的自我）と、絶対否定的なる対立に於て遭遇することを可能ならしめる、世界時間のその都度に於ける全的顕現として、「今」に於て開き了へたる、「そこ」なる宇宙的空間、超越の地平を意味する。

完成せる実存的空間として、始源的時間性の外に、世界時間を時熟せしめつゝ実存する現存在は、被投的投企として、その投企は徹頭徹尾被投的なる事実性（現前化的なる観ることの企画）に依つて制約せられ、かくてその事実的

なる実存と共に、直ちに「今」「此処」に存在者的に限定せられた自己実存の外に、かゝる自己と否定的対立に於て関係する、多なる存在者の偶発的生起を、その消滅と共に、存在の光の中に於て発顕しつゝ、存在するものの只中に実存する。即ち実存的空間を、絶対否定的に明らめつゝ帰り来る現存在は、それ自身世界時間の時熟そのものとして、世界時間たる自らの外に、絶対に自己を否定して立つ他の存在者――「自己より発して自己へ」といふ自己指示的視象に於て、それ自身世界時間を時熟せしめつゝ独立せる個的存在者として存在してゐる――を発顕的に現前せしめる。かくて純粋に被投的なる自己実存の発顕は、同時にかゝる被投的自己（存在者としての自己）を絶対に否定してその外に立つ、他の存在者の突如的発顕でもある。被投的実存として、自己の実存の被投的根拠を決して支配し得ざる現存在は、自体性に委ねられた自己の反省的投企と共に（それは自体的実存の固持への意志であつた）、直ちに襲ひ来る、かゝる投企の絶対的不可能性の可能性の、偶発的生起に対して不安である。発顕性とは、突如として現前し来る個物者の企投的なる可能性そのものとして、凡ゆる世界的存在者の、生起と滅亡との偶然性に対して開かれたる、偶然の可能性、偶発性の先取を意味する。従つてそれは常に、未だ来らざる存在者の企投的なる歴史的認識、existentia として表象される存在の抵抗的性格に関するものであつて、決してかゝる存在者の同語反復的な反省的仮想的指示たる、「である存在」essentia の自明的なる忘却的過去的前提に関するものではない。反省的思惟に基づく本質定義は、単に実存の反省的取り返したる絶対的反省の、個物化的なる限定、反省の反省に過ぎない。発顕性としての存在者の歴史的認識は、その都度の現存在の Da と共に、かゝる存在者を領域的、方向的なるその実存性に於て、先行的に決定するのであつて、常にその Was に関係し、反省的思惟に依つて獲得される存在者の Wie は、かく存在史的に決定され、発顕せられた存在者の、非歴史的なる追想に過ぎない。[註十二]

発顕性 Entdecktheit は人間の実存と共に常に生起する根本経験であり、時間性の外に閉ざされて立つ現存在を、再び時間性の開きの中へ、存在の真理の歴史的関聯へと引き入れるところのものである。存在の光、即ち Da の中に立つことに依つてのみ人間は一般に観ることと sehen が可能である。観ることとは併し乍ら、上述し来つた如く、被投的なる自体性に委ねられた実存の、企投的なる自己決定を意味し、観ることのかゝる企投と共に、存在は全体的に多なる存在者の現象として自らを顕現する。プラトンに於けるイデアの本義も、かく解されてのみ、初めてよくその完全なる意味を把捉し得るであらう。イデアとは、決して単に個々の実在を離れて、抽象的に客観的に離在するのでも、況んや主観に依つて勝手に考へ出されたものでもなく、厳密には只観ることのうちに於てのみ存在し、かゝる現前化的 vergegenwärtig な観ることにより、観ることのうちに於て、観られ得るものを始めて根源的に形成するのである。イデアとはかくて、かゝる現前化的な観ることの一義的な遂行の可能根拠として観られたるもの、そこに於て存在者がその Was に関して決定される、開かれたる視象的地帯を意味する。

観ることとは従つて、現象し来る存在者の現前的把持 Gegenwärtighaben として、自体的なる実存に於て根源的優位を持つ。予め此の様に顕現した存在者の意味で、存在を捉へ得た思惟のみが、存在者の存在をイデアとして、反省的に遂行しつゝ追想的に思惟することが出来るのである。「認識が如何なる仕方で、又如何なる媒介によつて対象と関係するにしても、認識がそれによつて対象と直接に関係するところのもの、凡ゆる思惟が媒介として目指すところのものは直観である」[註十三]。存在は純粋に直接的把捉に於て現象するところのものとなり、此の観る作用のみが存在を発顕する。さればギリシヤ哲学の早期より此の方、「観ることの喜び」が言はれ、「人間の存在には本質的に見ること の関心がある」として、観ることに特別の優位が与へられたのである。すべての認識が観ることとして、直観を目指

すといふことは、すべての認識が現前化的自己指示像の完成であることの時間的意味である。

4

今や後退し行く実存的空間の逆限定的開きと共に、存在者は明々と燃ゆるその現前性に於て、現存在に対して現象せしめられる。かく存在者を現象せしめつゝ後退する存在の光、明るみ Lichtung は、それ自身存在自らの隠蔽でもある。存在は存在者の中に自己を現はしつゝ、同時に後退しゆくものとして自らを隠蔽する。自己隠蔽的に存在は存在する。存在の此の自己隠蔽的なる後退と共に、存在は又、苛烈なる自らの創造原理を包み隠し乍ら、明るさを伴ひつゝ現前的に近附き来つて「そこ」Da を、存在者全体の、暫しの歴史的滞留の場所として開くのである。かく開かれた存在の光に照らされて、宇宙的空間の中に歴史的に滞留する個物的存在者は、存在を得て存在を失ふ存在の全体の全体的顕現として、それ自身再び存在を失つて行く限りに於てのみ存在してゐるのであり、滞留する存在者は到来と退去との間に、存在の此の全過程を全体的に顕現しつゝ、移行そのものとして移行的に滞留してゐるのである。曾て無かつた存在者が、存在自らの全体的顕現として、突如として「今」「此処」へと不在から時熟し来り、忽然として「今」「此処」から、不在へと存在を失つて行く。滞留する存在者は、不在と不在との間に現前的に滞在する。然るに被投的なる実存の反省的発顕（絶対的反省）と等根源的なる世界時間の時熟に基づいて、現前的に滞在する存在者は、滞留する現存在の自体的実存の固持への意志の企投的なる現前化として、それ自身持続的実体的であり、過ぎゆくものの此の不当なる現在的持続への意志の表象こそは、現在的に存在するものをその由来から切り離して、実体として捉へることを可能ならしめる、反照的思惟の企投的遂行（観ることの企画）なのである。自体的実存

のかゝる観ることの企画は、現在から現在への、飽くなき現前化の可能性の企画的遂行そのものとして、第一次的に今、今、今……の無限系列の全体的同時的現前化であり、「今なる此処」に顕現する点的存在者の完結せる全体の先取（図式——形象としてのみ可能）としてそれは、彼処天空に明るむ宇宙的空間に於て直観せられる。「世界時間は、それが属してゐる所の時間性の脱我的地平的構造に基づいて、世界と同一の超越を持つ」[註十四]、然るに、かく先取せられた世界時間の今系列 Jetzt-folge の全体は、個々の継起する「今」に於て、継起的に時熟し来ることに依つてのみ、自らを具体的に完成する。従つて世界時間のかゝる具体的なる「今」に於て、存在者を現成せしめて現前化を遂行する観ることの企画とは、かゝる企画の完成として、世界時間を現前化的に空間化せしめて之を完成することであり、ハイデッガーは之を解釈することを Auslegung と呼んでゐる。存在者が一義的に実体化せられ、現前化せられればせられるほど、時間的なる存在 Sein の隠蔽的近接も亦、それ丈一層仮藉なき一義性を以て迫り、益ゝ鋭く存在史的展開を推進せしめることとなる。一義的に存在者を現前化せしめることは、世界時間の時熟の仕方に基づき、存在者を自らの外に現前化的に発顕することに依つて、それの存在史的由来（あり来つた存在者の客観的存在性）の方向を忘れることであり、現在する存在者はかくて、かゝる仮想的主観的なる存在者として曾てより既にあり来つたものとして、自明的な明るさもて将来的企投的に「今なる此処」に、不在から切り離されて、自己指示的視象的なる個物者は、可能的なるものとしてではなく実体的に捉へられることとなる。かく捉へられることに依つて併し、存在者の現前的な歴史的滞留は、その不在への突如的移行に対して、無防禦的に曝露され得ることとなる。「存在の歴史は、存在の忘却と共に、然も必然的にそれと共に始まる」のである。

滞留の固持への意志として存在忘却的に、自らを一義的に決定することに依つて、此処に、存在者相互の否定的対

立は、愈々苛藉なき鋭さを以て現前化せられ、自己乃至は世界内部的存在者の存在史的由来に対しては、無防禦的に忘却し得た自体的実存も、同一の世界空間内に於ける、他の存在者との現前的なる否定的対立は、観られ得る近さに於て一義的意義を帯び、決して無関心的ではあり得ず、何よりも先づ自らを、否定的に現前し来る存在者との関係に於て自己決定的に見出すのである。抵抗的なる他者との否定的対立関係に於て自体的実存は、身体的自我として存在者的に発顕せられる。自体的実存の観ることの企画は、現前化的に発顕せられた身体的全自我の、歴史的滞留の固持への意志である。存在者の全体は、かく発顕せられた身体的全自我との存在史的関係に於て企投的に了解され、解釈的に現前化せられて、世界内部的存在者 das innerweltliche begegnende Seiende として一義的に規定され得る。現存在は併しかゝる世界内部的存在者の現前化的完成の根拠を、自体的実存の第一次的な取り返しと共に先取した、世界時間の有意義性の統一 Die Einheit der Bedeutsamkeit に於て持つ。

反省的に取り返された、始源的時間性の絶対否定的統一たる「今」は、その取り返し可能の事実的根拠 Um-zu を被投的なる自己の実存に於て持つと共に、その可能的根拠 Um-willen を、被投的自己の企投的なる実存性に於て持ち、かくて両根拠の全体的顕現として時熟し、事実的に「そこ」Da として開かれた世界は、正に一切の個々夫々の場合の「の為に」Um-zu の先取として、「為そのもの」Umwillen von……、「の為に」の全体である。「現存在は事実的に実存する限り、此の『自己自身の為に』das Um-willen seinerselbst と、夫々の場合の『の為に』Um-zu との聯関に於て、自己企投的に自らを了解してゐる。実存する現存在が、そこに於て自らを了解してゐるところのものは、現存在の事実的実存と共に『そこ』にある。……現存在は実存しつゝ自らの世界である」[註十五]。世界時間のかかる時熟と共に「そこ」に現前する世界は、「為そのもの」Umwillen von…… の全体的顕現としての有意義全体性 die

Ganzheit der Bedeutsamkeit であり、かゝる有意義全体性のその都度の「今」に於ける具体的限定たる、事情全体性 Bewandtnisganzheit の「そこ」Wozu から、今、今、今に於ける個的なる「今なる此処」Dazu へと帰り来ることに依つて、世界の中に遭遇する存在者は、徹頭徹尾有意義性に依つて規定されたるものとして、存在者の Was は als の構造を持つ帰属存在者 Zuhandenes 価値的存在者である。従つて単なる事実 Faktum と言つたものは、もと我々にとつて存在しない。根源的な実存の事実性、被投的なる実存と雖も、被投的投企として既にあつたのであり、事実は常に、「既に……として」の事実であり、何等かの視 Sicht 乃至は価値観点 Zweck-punkt の解釈的現前化である。

予期的現前的に存在者を近附け乍ら、かく近附けることに依つて現前化作用は、「そこ」Da からして近附き来つた根拠たる「そこ」を、距離撤廃的に忘却し、現前化せしめられた存在者に自らを失ふ。従つて世界内部的存在者の観察が、かゝる一つの現前者に於て現前的に始まるならば、事物は無規定なる空間一般の中に物在する Vorhandenes といふ、アリストテレス—トマス的な対象的認識の仮象も成り立つこととなる。

「投げられたるものとしての現存在自身に引き渡され、かゝる自己の為に Um-willen seiner 実存しつゝ、同時に現存在は……の傍らに存在する Sein bei…ものとして現在的である。現在の地平的図式は『為に』に依つて規定される」[註十六]。有意義性の統一たる「為そのもの」は、自体的実存の自ら背負ひ行く歴史的滞留への意志として、「自己自身の為」Um-willen seiner selbst であり、「為そのもの」の自由なる企投によつて、自己自身に義務附けられつゝ現存在は、かゝる視 Sicht の地平に於て顕現し来るもののみを、企投的解釈的に現前化せしめる。「今」とは従つて「かくかくの今」であり、配慮的交渉 der besorgende Umgang の視 Um-sicht を構成する適不適の「今」で

ある。「『今』の構造には有意義性が属する」。世界時間の時熟たるかゝる「今」は、今系列の完結的全体の先取としての、有意義全体性の「今」であると同時に、有意義全体性のその都度の「今」に於ける、完成的解釈的現前化として、夫々独自的なる今、今、今の分節的、断絶的なる継起でもあり、かくて、先取せられた自己目的的全体（歴史的滞留への意志としての有意義全体性）を、かゝる継続的なる「今」に於て全的に顕現しつゝ、之を有的肯定的に（現前化的観想的に）包括せしめて、視られ得る非連続の連続としての有機体的、弁証法的な、止揚的 Aufheben 発展的展開を遂行する。換言すれば、世界時間の時熟とは、世界自らの「為そのもの」の内部に於て、相互に絶対否定的に対立する点的個物者を、夫々その「自己の為に」の独自的存在性の儘、多なる「今、此処」に分節的に措定せしめて、之を包括的に世界内部性として、「現存在自らの為に」に依つて統一するところの、絶対矛盾の自己同一化の弁証法論理の企投的現成を意味する。

世界を「自己自身の為に」に依つて、弁証法的（止揚的、発展的なる現前化）に形成しつゝ現存在は、その都度既に、現前し来る世界内部的存在者の全体を越えてゐる。現存在とは「超越の中に且つ超越として」世界企投的に、存在者の全体を越えつゝ実存することの謂であり、「超越は人間的現存在に固有なるもの」、「人間の一切の行為に先立つて生起する」現存在の根本構造である。我々は之を世界時間の時熟として明らかにした。超越によつて現存在は、自らをその「何であるか」Was に於て決定しつゝ自己性（被投的企投たる開示性乃至は世界性）を構成する。かく構成的に決定せられた自己性は、自体的実存の歴史的滞留意志のその都度に於ける全体的企投として、有意義性の統一たる世界であり、かゝる世界の世界性の時熟と共に現前し来る存在者の全体は、その「何であるか」Was に於て決定され、位階と場所、意味と重要さ等々夫々の段階秩序を賦与せられて価値的存在者となり、世界帰属的に現存在

との交渉性に持ち来される。「超越の遂行に於て現存在は先づ第一に、存在してゐるところのかゝる存在者に、即ち自己自身としての現存在に帰属する。超越は自己性を構成する。併し超越の遂行は差当つて此の自己性にのみ関はるのではなくて、常に又現存在ならざる他の存在者に関係する。詳言すれば、超越の中で又超越に依つて存在者の内部で、誰が自己であり、如何に自己があるか、そして何がそうでないかゞ始めて区別され、決定され得る。併し現存在が自己として実存する限り、そしてその限りに於てのみ、現存在は、予め越えられてゐなければならぬ他の存在者と交渉することが出来る。存在者の只中に存在しつゝ、且つ存在者に依つて捉へられてはゐても、現存在は、実存しつゝあるものとして常に既に自然を越えてゐる」。[註十七]

超越に依つて越えられる存在者の全体は、原本的意義に於てそれは、絶対に過ぎ去れる世界としての大地であり、かゝる超越のうちに且つ超越を通じてのみそれは、絶対に過ぎ去れる世界としての存在者であつて、開かれつゝある絶対に未だ来らざる存在ではないことが、一義的な鋭さを以て開示され得る。超越のかゝる根本構造に基づいてのみ、現存在に於て、存在と存在者との原本的なる区別が生起し、現存在に対してかゝる存在論的差異 die ontologische Differenz が根源的に明らかであるが故にのみ、現存在は、如何なる頽落の状態の中に在つても、存在者が開示されるところ、常に根拠を問ひ、更に自らを飜転せしめて、存在者との厳しき対立に於て、存在とは何かと問ひつゝ、超越の中に且つ超越として実存することが出来るのである。存在そのものの後退的近接に基づく存在論的差異によつて喚びかけられた学としての哲学は、かゝる根源的問ひの一義的な遂行の固持に於て、隠蔽されたるもの、不在なるもの問はるべきものの只中に、覆はれることなく曝されつゝ実存する為の故郷建設として、只管に基礎的存在論の完成を目指す。

5

世界時間を宇宙的空間に於て見出す現存在の超越は、自体的実存の歴史的滞留への意志として、運命との隠れたる宥和である。先験的対象Xを思念することの中に於て時熟する、始源的時間性の持つ創造的なる絶対否定的矛盾は、現存在に於て運命との根源的宥和に基づき（存在の開きを完成せしめつゝ被投的なる自己実存を取り返す視ることの企画）、観ることの中に於て自己指示的に開かれ完結し行く、有たる宇宙的空間の内部に於ける、存在者相互間の観られ得る対立として相対化せられ、更に有意義全体性による現実化的企画の遂行は、かゝる対立をも無限に撤廃する意志として、即ち存在者相互間の絶対否定的対立を、あれもこれもとして包摂化することの具体的企投として、現存在の世界企画（乃至は存在者の本質 Was の決定）は、運命との限りなき宥和を目指す体系的価値の実現、乃至は規範の充実である。世界の飽くなき合理化への、対象化への、価値実現化への意志こそ、総じて人間意志による存在者（絶対に過ぎ去りつゝある大地及び宇宙的空間）の目的的なる有的企投こそ、存在の忘却の歴史を形成する主体的人間の自覚史、形而上学の歴史である。不合理的なるもの、例外的なるものは、只かゝる体系意志の企画的志向 Erstreben に於てのみ、打ち克ち難き抵抗として遭遇され得るのであつて、却つてかゝる体系意志のアプリオリ的存在の、最も積極的なる証明である。かくて我々は「現実的なるものは理性的であり、理性的なるものは現実的である」といふ、ヘーゲルの根本命題を、自体的実存性に委ねられた人間存在の、企投的なる歴史的真理として、全的に肯定することが出来よう。之に対する非合理主義的批判は、前述の如く、ヘーゲル哲学の不動の存立を立証すると同時に、かゝる批判自体が、既に非歴史的なる追想的反省によるものとして、その出発に於て、ヘーゲルとの積極的なる対話は拒

まれて了つてゐる。体系意志として概念的（ヘーゲルの意味での精神の本質たる自ら思惟する思惟そのもの、絶対的反省）に投げ出された自己実存の発顕は、かゝる被投的自己の至純なる再現 Repräsentation によつて遂行される、自己実存の概念的形成である。企投的に自らの被投性へと帰り来ることに依つて発顕される、かゝる体系意志の企投の根拠は、デカルトに依つて ego cogito sum として、即ち res cogitans として確立された、表象的に企投された世界内部的存在者の対象性一般と、表象する自己とが、表象的に思惟する cogitare ことの中に、共に常に確証された形（絶対矛盾の自己同一として完成されたる現前性）に於て表象的に顕現し、確実なるものは、自己の思惟的企投と同時に、疑ひ難き確実さを以て自己自身が、res cogitans として存在するといふことであり、自体的実存はかくて、ego cogito といふ在り方で既にあり来つたものとして、自己自身に対して、明証的自己確実性を以て再現的に明らかとなる。自己確実性として打ち樹てられた此の自己再現的表象は、主体的自由の根拠、基体として、主体的自己の存在、主体性の意識である。然るに主体性の意識とは、無制約的なる自己認識の意識、自由なる独立的存在者として自体的に実存することの意識であり、それは、かゝる自己意識の自己確実性を、無制約的な確実性に於て知ることを目指す、存在全体の概念化的体系の現前化的企投によつて、自己還帰的に自証されうる。体系化され、概念的に把握されたる世界の中での、無制約的なる自己認識こそ、完成せる主体性の意識を以てするところの、自己意識の無制約的なる自己確実性であり、絶対知としての此の知の中に存在することによつて、主体的自由に基づく体系的企投は止む。我々は之を、自体的実存に於ける、了解 Verstehen の自己完成たる解釈 Auslegung と呼んだ。解釈的に世界時間を時熟せしめつゝ被投的自我は、不断に「自己自身との限界なき、相等性の自由へと帰り行く、純粋な自己関係的統一」であり、「概念として現存在に帰して了つてゐる、純粋概念そのものである」[註十八]。

自体的実存はその歴史的滞留の企投に於て、自らを、自ら思惟する思惟そのものたる概念として発顕し、かゝる概念がその機能的展開に際して自らの不可避的なる可能根拠として前提する自己同一的存在者A sich-selbst identisches Seiendes Aをあり来つた存在性の抵抗的規則的性格に於て把捉することなく、忘却的に之を現前的なる仮想的性格に変様せしめてその無制約的なる自由の体系を、現前化的に実現しつゝ実存する。概念が時間の力に代つて登場し、時間性そのものは、概念の隠に匿れて無力化して了つてゐる。概念は今や世界時間として自らを時熟せしめる。かくて存在者は他の存在者との対立的関係に引廻されて特徴附けられ、比較によつて抽象され捨象せられてalsの関係に引入れられ、そのあるが儘の独立的存在者性（絶対に閉ざされたる過ぎ去れる世界としての抵抗性）は歪曲せられ、類的価値一般に於ける対象的個物者乃至は財として、普遍化的帰属化的に改釈せられて、自らを包み隠しつゝ、存在者として現成し近附き来つた存在は、此処に、人間の恣意に依る第二の隠蔽に依つて、存在の光りを全く喪失し、時間性の外に周辺的に落ち来つてVerfallen価値段階的秩序を基とする虚偽の王国を創設する。価値の実現乃至は規範の充実を目指す概念的体系意志は、虚偽への意志として自らを曝露する。

歴史的滞留意志として世界時間の「今」を壟断する現存在に依つて、有意義全体性に変様せしめられた開かれたる地帯Daから、将来的既存的に、その都度の「今なる此処」に帰り来ることに依つて、alsとして現前する対象的存在者乃至は価値的存在者は、それ自身世界時間の時熟に基づいて、脱我的に世界時間の外に落ち来れるもの Verfallen-seiende 到着せるもの Zukommen-seiende として、完成せる概念の体系そのものである。概念の体系は現存在の事実的実存と共に、その都度既に完成されたるものとして「今、此処」にある。概念の自己完成的企投は更に、「今なる此処」に現存する概念の体系（個々の価値的存在者たる財乃至は財の総体）を、自己の中に取り入れる終局の完

成的解釈を敢行して、自らの目指す、無制約的な自己確実性の絶対的自由の意識を達成する。即ち世界時間の時熟に基づいて、現前的に落ち来れる価値的存在者は、その全体的なる企投の完成と共に、曽てあり来つたものとして「今なる此処」に絶対的明証さを以て現前化せられ、かゝるものとしてそれは、企投の根拠の残る隅なき現前化そのものであり、現前化せられたるものをかく現前的に近附けることに於て、正にその企投の根拠たる、「自己自身との限界なき相等性の自由」へと全く帰り行き、自己忘却的に、現前化せられた価値的存在者に自らを引渡す。対象的乃至は価値的存在者の把捉は、何等存在するものとしての所与に関与せず、専ら現前化し来るものに、脱我的忘却的に自己自身を打ち委せる陶酔的なる相等性の可能が、価値一般の企画として配慮せられてゐるのである。かくして体系への意志は、世界時間のその都度の「今」から落ちて、全体的に顕現し来る完成された概念の体系（対象的存在者乃至価値的存在者の全体）に於て、完全にその目的を満し、自己喪失的に、かく現前化されたるものに沒入しつゝ、自己へと還帰した意識の動揺なき現存に於て、自らも亦時間性の外に全く落ち来つて実存する。存在の忘却はかくも底深く遂行せられてその終末に達し、現存在の頽落は美的実存として完成された。存在を得て存在を失ふ存在全体の、創造的企画を目指すディオニュソス的認識意志は、現存在の歴史的滞留と共に現前し来る、存在の完成的全体（存在者）に自己充足的に囚はれて、価値的なるものの予期的配慮の中に自らを喪ひつゝ、その創造能力と創造意志との全体を消耗し、「勝利の為に多くの齢を重ねる」美的実存として、甘美なる気安さの中に帰り憩ふて了つてゐる。

現存在との本質的実存的統一の中での世界の歴史的滞留は、世界内存在として実存してゐる、現存在の歴史性を定立すると共に、かゝる歴史的世界は事実的には、過去現前的なる世界内部的存在者（帰属的存在者）の世界としてのみ存在する。世界内部的存在者を現前せしめつゝ実存する現存在は、今日の現前に沒入して、継起的な「今日」

「今日」の予期的配慮的な現前と、過ぎ去れるものの忘却の中での、日毎に過ぎゆくところの多数の中に分散する可能性が、配慮的に企画されてゐる。換言すれば、現存在の歴史的滞留と共に、その都度既に臨現する絶対者、即ち有意義全体性（現存在の歴史的滞留の事実的存在可能）の分節的顕現に依つて、自己分割的に自らを消耗する可能性が配慮的に企投されてゐる。主体的自由に基づく美的実存の、現前化的、綜合的なる一切の存在の企投は、語の最も根源的なる意味に於て分析的である。我々は此処に、ヘーゲルに於ける概念の弁証法的展開が、その完成と共に直ちに自らを、価値一般を予期的忘却的に配慮する美的実存に引渡し、自己自身との限界なき相等性の自由の中に在つて、現前し来る体系（価値的存在者の全体――世界への頽落的没入として現存在の美的実存は、存在史的現成の階程に従つて先づ差当り、類的なるものとしての das man であり、das man の歴史的滞留意志に対応する体系――価値的存在者――の全体は商品 die Waren であるであらう）の、無制約的なる現在化的支配の可能に身を委ねつゝ、個的なる自体的実存（das man として頽落的に実存してゐる個々の美的実存を意味すると共に、更に一民族又は一階級等の類的なる美的実存をも意味する）の歴史的滞留意志を無制約的に遂行するや否や、直ちにそれは、本質的に多としてのみ現成する歴史的世界に在つて、他の個的なる自体的実存の歴史的滞留を、自らの完成されたる体系（例へば経済機構）の外に疎外することになり（自体的実存の持つ主体性を奪つて自らの体系の中に一価値的存在者として編入する）、かく疎外せしめれた他の個的実存は、奪はれた自己の無制約的なる主体的自由の事実的可能を、現前化的に取り返すことを目指して、今日の支配者階級と戦つて相搏つ（闘争それ自体が既に、無制約的なる自由の陶酔的可能の先取として、正に陶酔そのものである）、被支配者階級の権力意志の表明、マルクスの唯物弁証法へと、弁証法的に移行する必然性を、全的に把捉し得る立場に達してゐるのである。ヘーゲルに於ける概念の弁証法的展開を、逆倒せるも

のとなして之と対立し、自体的実存にとつて最も身辺的なる、商品の分析から出発したマルクスの唯物弁証法の展開は、その外見上の著じるしき相違にも拘らず、上述し来つた如く、彼の意図に反して、世界時間の時熟として絶対弁証法的に止揚せられた、ヘーゲルの概念の弁証法を、全的に推進せしめることに依つて、同一次元内に於て達成せられ得る。マルクスとは第一のヘーゲルに依つて自己疎外を受けたる、全く同一の第二のヘーゲルであり、ヘーゲルが今日の支配者階級の全意志を表明するのに対して、マルクスは明日の支配者階級を目指す、今日の被支配者階級の全意志を表明し、相共に同一の美的実存の根源的形式として、自体的実存の歴史的世界の頽落を構成する。かくて両者は全く同一の自体的なる概念的意志の形而上学であり、氾濫する自己の創造的なる充実に堪へ得ずして、創造するものなき消耗的自己分割に依つて、陶酔的なる虚偽の王国を創設する方法論として、正にニヒリズムそのものの根源形式たるの栄誉を担ふ。

歴史的世界は仮象の世界としてのみ事実存在する。仮象的世界の持つ、幻想的なる虚偽の美に誘惑せられて、距離撤廃的に、自己自身との無制約的なる同一性の甘美なる陶酔を、可能的なる頽落の到る処に於て追想的に企投する美的実存は、自己喪失的に自体的なる自らの頽落的美的実存をも、救ひ難き危機へと追ひやつてゐる。

6

自体的実存の反省的取り返しの遂行に依つて、存在の原闘争は、神祕的直観裡に観られ得る矛盾的対立として、大地と宇宙的空間とに引き裂かれ、更にそれは、直ちに世界時間を時熟せしめて、価値二律背反に基づく階級闘争（価値二律背反に基づく、日常的な我々の一切の対立的抗争、乃至は自虐的葛藤をかく一般化しておく）へと水平化的に

偏向せしめられた。そこに於ては、反省的思惟自らの持つ静的なる観想性格が、美的なる自体的実存の固持への意志として、その企投と共に直ちに誘発する他実存との対立に於て、価値二律背反的に自覚せられ、無制約的なる権力意志の遂行者としての自己を意志しつゝ、自己貫徹的、主体的に、行動化し、実践化して行く可能性が、存在史的運命として、必然性を以て展開せられた。観想的静的なる非歴史的形而上学は、自らの完成を目指して不当にも歴史哲学化せられ、行為的に主体化せられ、かくて今日哲学は、主体的意志の形而上学として、価値媒介的に、理論と実践との統一を目指す世界観、人生観的要求の前に、全くの危機に曝されるに至つたのである。世界観とは、自体的なる実存が、他の自体的なる実存との絶対否定的なる対立に於て、陶酔的自我の完成を目指して揚言する、無制約的なる自己貫徹の企投の可能根拠として、正に権力意志そのものの具体的なる表現である。現存在が権力への意志としての自らの人間存在（自体的実存）を意志し、その人間存在が全体として、権力意志に依つて規定せられた現実に属してゐることを経験する時、それは自体的実存の全体を先取せるものとして、正に形而上学の完成である。我々は之を又、現存在の歴史的世界への侵入の完成と名附けておかう。

今や現存在は世界時間を時熟せしめて、身体的全自我を、余すところなきその被投的現実性に於て取り返し、今此処なる日常的美的実存を、その自体性に於て完成せしめるや否や、かくの如くにして時熟した自体的実存の陶酔的完成は、直ちに自己を疎外して、之と絶対否定的なる矛盾的対立に於て立ち、類的なる自体的実存（大地）の取り返し的完成に在つては、支配者階級に対する被支配者階級の疎外によつて、又一社会の種的なる完成に在つては、自らの中に必然的に惹起せしめる、自由なる個的実存の疎外によつて、更に又一個人に於ける自体的実存の完成に在つては、かく被投的に完成した陶酔的なる美的実存を、倦怠を以て襲ひ、憂愁を以て包み、不安によつて震盪し、真昼と

暗黒との交替する凄絶なる美の中に在つて虚無の味はひを味はひ、自虐的に我と我身を喰ひ尽くしつゝ、魔的なるものに自らを委ねんとするデモーニツシユなる欲求によつて、夫々完成せられた自己実存の自体性（被投性）を、破局的に虚無の深淵へと導びいて行く。

存在を得て存在を失ふ存在の全象面に亘つて、全体へと打ち開かれゆく存在の絶対否定的なる拡がりの余りの明るさに、めくらめきて自らを失ひ、曽て自らが先験的対象Xを思念することの中に於てのみ贈られたるかゝる思念の事実根拠を、「ある」と名附けることに依つて、企投的にかくあらしめたその実存性を忘却して、現前し来る此の全体的拡がりを、既にあり来つたものとして、追想的回顧的に（観想的停滞的）、「ありてあるもの」と名附けて之をその過去現前化的被投性に於て呼び止め、自らの被投的なる完成に酔ふことに依つて仮想的存在に転落せしめられて顕現した、即自的なる存在の全体は、その完成的現前と共に直ちに自らを疎外して、企投的に先取せる絶対的有としての他の即自的全体存在を、之と絶対否定的に自らの中に対峙せしめて、永劫に勝利を得ることなく相共に打ち仆れる、神々の戦ひを現前化的に時熟せしめる。かくの如く神への絶対的随順と、絶対的反逆との真只中に自らを引裂きつゝ実存する現存在は、それ自身、被投的なる実存の自体的完成を絶対に否定して、企投的に、an und für sich なる実存の全体的完成を全的に企投するものとして、正に世界時間そのものの時間的顕現である。即ちかゝる絶対矛盾的対立の苛藉なき一義的保持自体が、自体的実存の権力意志の最高の完成であり、自体的実存そのものの上昇の極限であり、そこに於て自体的実存は、an und für sich なる自らの最高の完成を、存在である限りの存在の全体を先取することによつて達成せんとするのである。被投性に委ねられた存在の原闘争は、世界時間の時熟と共に反省的に取り返され、かくて人間は有たる階級闘争の真只中に在つて、その最高の勝利を目指して実存する。換言すれば、即自的

なる存在の全体は、世界時間の完結的時熟と共に、既に階級闘争の具体的事実的なる対立的現前に於て、権力意志の最高の高潮たる、全体的勝利の企投的先取として、即ち権力意志によつて規定されたる、an und für sich なる全体的現存在として「今」「此処」に、解釈的現前的に、被投的事実性を以て達成せられて了つてゐる。

然し乍ら、此処に絶対否定的に相搏ちて戦ふ両者は、被投的なるものとして現前する、存在の全体の完成体たる有としての神と、企投的に先取せる、存在の全体の完成体たる有としての神とであり、何れも過去的、即目的 an sich なる絶対の有として、一は絶対に過ぎ去れる神の不当なる現前を、他は絶対に未だ来らざる神の許すべからざる現前を、夫々責めつゝ弾劾し、相互絶対否定的に之を、絶対に過ぎ去れる世界と、絶対に未だ来らざる世界との、無限に相距たる存在の両象面へと現前的有的に引裂かうとする、正にその限りに於て、その絶対的否定が何れの神に依つて遂行せられようとも、絶対的否定の統一として時熟し現前し来るものは、an und für sich なる絶対の即自的有、自体的実存の全体的顕現として、神祕的直観の現前化的完成そのもの、生の甘美泡満の企投、享楽の執着の完成たる、自体的にして創造するものなき脱我の脱我的遂行の終焉、虚無的滅亡に他ならぬ。従つて階級闘争それ自体によつて、全体的に顕現し来る存在全体の即自的なる完成も、対立する両自体的実存の死即愛の懺悔道によつて死復活を遂げ、その対立の儘に於て融和的に肯定せられる an und für sich なる自体的実存の完成も、況んや凡百の目的的なる理想主義的企画も、それを事実的現前化的に達成せんとする限り、即自的なる存在の全体の完成態たる虚無的滅亡ではあつても、断じて an und für sich なる存在の全体の完成ではない。美的実存の完成として、永劫に繰返して終熄することなき、悲惨なる神々の戦ひへの逆転ではあつても、未だ被投性に委ねられた企投的なる全実存の全体的なる取り返しではない。被投性に委ねられた自己実存を、その全き被投的投企たる自己の自己性に於て奪ひ来つた世界時間の時

熟は、反省的取り返し（絶対的反省）の最高の完成と共に、直ちに自己疎外を生起せしめて、その取り返しの絶対的拒否に逢着し、存在の否定が直ちに否定の存在に逆転することによつて、不可避的に襲ひ来る虚無の深淵を深めつゝ、進むも危ふく退くも危ふく、止まるも振り返り見るも危ふき懸橋の上に立つて、被投的投企たる自己の本源的自己性に就いての、全実存を以てする絶対的懐疑の真只中に投げ込まれるに至つた。

我々は曩に人間が美的実存として、既に引き入れられて了つてゐる哲学に従つて、改めて無から哲学を始めることなしに、伝承されたもの、自らの過去的なるものとの一体的同一の追想に於て、恍惚的脱我的に、かく追想されたものの企投的現前化に自らを喪ひつゝ、実存することが可能であるといふこと自身、被投的なるものとして自らが一個の完結せる体系であり、かくて危険なき体系の被投的完結さの中に在つて、自己喪失的に、デイオニユソス的認識意志としての自らの企投的本質を、放棄するものなることを述べた。今や然しそれはより具体的完結的に展開せられて、かゝる体系はそれ自らの中に、確実にして然もその何時といふことに関しては無規定なる、虚無的滅亡の到来を、本源的なるものとして、不可避的必然性を以て隠し持つものなることが曝露せられた。自体的現存在は完成されたる美的実存として、その都度既に自らの虚無的崩壊の、絶対的危険性の中に在つて実存する。世界時間を全体的に先取する自体的実存は、既にあり来つたものとして将来的に顕現する、ニヒリズムの此の不可避的なる到来を、その不可避的必然性に於て、運命愛として肯定すべく余儀なくせられて了つてゐる。それ故、その真に時熟せる決定的なる階級闘争に於て、現前化的に企画せられるものは、陶酔的なる一方的勝利の an und für sich なる絶対的有ではなくして、むしろ先取せる勝利自らの包蔵する、無意味なる終焉としての虚無 Nichts そのものである。権力意志そのものを挫折せしめ、体系の全体を蔽ふて迫るニヒリズムの不可避的なる到来を、無力化した権力意志と、崩壊に頻し

た体系の只中 Mitte に dionysisches Ja-sagen を以て運命愛として引受けつゝ実存する、現存在の此の唯一の肯定形式の中に、抑々如何なることが生起するのであらうか。

絶対に打ち開けた体系の持つ明るみの中から、絶対に自らを閉した虚無が、かく閉ざされたるものとして、即ちその絶対否定的なる無の無性 Nichtigkeit des Nichts に於て輝きつゝ、将来的なる必然性を以て現前化的に時熟し来る時それは、現存在を苛藉なき無気味性を以て襲ひ、沈默的に呼びかけて次の如くに問はしめるであらう。即ち「何故一般にあるもの Seiendes があつてむしろその反対に無 Nichts が存在しないのか」と。逃れんとして逃れることの出来ない無に就いてのかゝる余儀なき思索を、沈默的に問ひ且つ答へつゝ現存在は、かくて無の存在の絶対的なる肯定へと転じ、権力意志自らに対して絶対否定的なる否を言ひつゝ実存するに至る。体系そのものの絶対的否定として、体系自らの最も奥深き内部から、自らを包み隠しつゝ迫り来る無の存在の肯定として、絶対的なる否を言ひつゝ実存することとは然し、無の無性の最高の是認として、余すところなく体系化せられた自己実存をその絶対的否定性に於て受取り、かゝる無化することを助けて、絶対に現前化せられることなき体系を、その無的到来性に於て時熟せしめつゝ、之を既にあり来つたものとして実存の根柢へと到来せしめ、実存そのものを絶対的浮動の状態に曝さしめることである。今や権力意志はその絶対的挫折と共に、自らを無化する (nichten) デイオニユソス的認識意志として死復活を遂げ、体系全体の非現前化的到来への企画に於て、完成せられて今此処にある体系からの端的なる袂別を遂行しつゝ、目標なき超越の方向を、一義的に鋭くその無目的性に於て決定する。現前する存在者の全体を既に過ぎ去れるものとして之を過去化せしめ、あり来つた存在の全体に対して絶対否定的にかく袂別する自我を意志し、此の様な自我を自らのものとして決定的に意欲することこそ、最高の存在史的必然性として完成されたる最高の創造的

自由であり、存在そのものの全体的企投である。

此処に於て an und für sich なる存在の全体の、全体的完成を目指すデイオニュソス的認識意志は、「端的に見へないものとなることを」目指し、非現前化的現前に於て自らを取り返すことによつて之を達成すべく、自らの創造能力と創造意志との全体を結集して、即自的に完成せられた全体的存在を、即ち永劫へと目指して現成し来つた存在の全体系を、絶対に否定して之を、永劫へと向つて失はしむべく、最高の存在形態を以て完成した an und für sich なる権力意志的自体的実存を、惜しみなく放下して、そこからして存在の全体を得来つた根拠たる無へと向つて、絶対的放浪への旅立ちを決意する。自己実存の根柢を、体系の絶対的否定への意志として時熟せしめ、企投的将来的に、体系的なる自己実存を、その絶対否定的なる無化 Nichten に於て先取せるデイオニュソス的認識意志は、今や勝利そのものから身を護りつゝ、如何なる美の誘惑にも停滞することなき絶対的漂泊者である。然うして、対象化せられ、価値一般化せられた体系的存在の自己矛盾的浮沈の底から、永劫の運命を劈いて決断される此のさすらひとは、忘却（存在忘却の歴史を構成する体系意志）の忘却の遂行に於ける想起の只中に、あり来つた存在者をばその本源的なる過去的存在性に於てあらしむべく、無なる自らの真の故郷を取り返しつゝ、母なる大地へと帰りゆくかの帰郷なのである。

「総べては空しく、総べては等しく、総べては過ぎ去れるものであり、一つの信仰、最善のものすら自らの営みに倦怠する大いなる悲哀の歴史」、ニヒリズムの全歴史を、全的に時熟せしめることに依つて之を積極的意義に於て打ち貫き、即自的なる全体的存在の絶対否定による、an und für sich なる全体的存在の全体的顕現の場として開示し、現在の此の危機的世界を、最高の姿に於て完成されたる存在の体系（絶対的崩壊を内に含む）、祝福されたる真正の

故郷として取り返し得た基礎的存在論は、失はれたる故郷をして故郷たらしめ、確固として之を故郷性に於て繋ぎ止めたるものとして、正に最も故郷的なるものでなければならない。絶対に打ち開けた故郷の持つ明るさの中に、自らを包み隠しつゝ近附き来り、かゝるものとして繋ぎ留められたる絶対に自らを閉ざせるもの、故郷性とは併し、不断に引き退きゆく明るさに於て、自らを告知し来つた無の明るさを、その引退き行く無の無性に於て、企投的に明るましめよといふ聖なる喚びかけであり、より経験を重ねたものとなつて（無を無することの）自らを取り返せしむべく、故郷の息子等をしてさすらひへと旅立たしめるところのかの目くばせである。従つて基礎的存在論を、故郷の故郷性にまで建設するといふことは、故郷の息子等に挨拶しつゝ、近附くかの無なる喚びかけを、かかるものとして之を言葉もて故郷のはらから達に伝達することに他ならない。体系の中から自らを包み隠しつゝ挨拶して近附き来るかの無とは、最高の勝利に於てすらその中に隠し持つ無を、読み取り得る迄に成長した故郷の息子達に対して、存在の無の証し人たれとの、存在自らによる聖なる喚びかけであり、冷やかに秘められたる故郷自らの贈る此の最後の贈物を、感謝もて受取る故郷の息子達は、存在の真理の証し人となつて帰郷せんが為に、絶対的なる漂泊へと旅立つのである。彷徨へと旅立つ故郷の息子が、最高の感謝と恭順とを以て袂別しなければならないものこそ、実に、故郷をして故郷たらしめ、確固として之を故郷性に於て保持せしめ得た基礎的存在論そのものに他ならない。完成せられた基礎的存在論は、今日に至る迄の全歴史と共に、既に絶対に過ぎ去れる世界に属し、存在者として自らを包み隠しつゝ、不断に自己を曝露し来つた無なる始源的時間性であり、自らの創造した頽落的なる現存在を歴史的に滞留せしめ、仮象の世界の持つ美の誘惑に打ち克たしめて、次第により強き否を言はしめつゝ、高きへと向つて問はしめ来つた根拠であり、神的なるものに就いての夢を、青銅の如き強さを以て養ひ来つたところの揺籃であつたのである。現

存在は実存する限り、その都度既に揺籃の永き夜の眠りの中に在り、存在の充実に与りつゝ不断に超躍の用意に於てある。今や、始源的時間性の持つ無 Nichts の無化する nichten 働きを、余すところなく修得し終へた被投的現存在は、此処に存在自らの贈る無の喚びかけに応じて、自らに托されたる存在の全運命を選び取り、習ひ覚へた Nicht-sagen に依つて、自らの何者たるかを証しすべく、あり来つた自らの故郷、始源的時間性たる基礎的存在論そのものに対して、沈黙的決意的なる、絶対的否を宣するのである。

「一片の過去に対する、即ち私の旅路の最も美しいが又最も危険なる海の静けさに対する、私の心からの恭順と感謝、……その実の別離、告別」[註二十]。母なる大地への感謝の応答として、あり来つた被投的自己の全体的なる取り返しを、惜しみなく放下して遂行されるかゝる袂別とは、被投的自己の単なる拒絶でもなければ是認でもなく、全くの無目的性に依つて貫かれたる最高の自由として、沈黙的なる無の喚び声を、言葉へと齎らすべくして遂行される惜しみなき自己費消である。体系からのかゝる徹底的なる袂別に於て、無を無する現存在の絶対無の底から、無を無化することによつて響き渡るかの創造的建設的なる言葉こそ、世界の良心そのものとして、最高度に於て歴史的であり、現存在をその超越的実存性に於て完成せしめる。かくて運命との如何なる融和も許されざる実存の自由なる決断が、贈られたる絶対の無に於て、超越として遂行せられ、濁りなき素朴さを以て無を無する時、現存在は此処に、鋭き単独化の中に在つて全くの無防禦に曝されつゝ、運命的実存として絶対的危機を時熟せしめる。此の時、然り正に此の時、自ら無を無化することに依つて過ぎ去らしめた、即自的、仮象的なる世界が、到来する無の中から、無ならざる絶対にあるもの（an und für sich なる全体的存在そのもの）として、電光の如き明るさを以て迫り来り、赤裸の頭もて立つ漂泊の旅人を、絶対に過ぎ去れる世界、大地へと打ち斃す。

完

註一、拙稿「ハイデガーに於ける超越の問題」、哲学第二十八輯、一三三頁—一四二頁参照

註二、Vgl. Sein und Zeit, 4 Aufl. S, 133

註三、Vgl. Über den Humanismus, S, 16.

註四、a. a. O, S, 13

註五、a. a. O, S, 15

註六、a. a. O, S, 16

註七、Vgl. Sein und Zeit, 4 uAfl. S, 325～331.

註八、a. a. O, S. 284

註九、Vgl. Holzwege, S, 43. Über den Humanisnus, S, 43.

註十、Vgl Was ist Metaphysik, 5 ; Aufl. S, 36.

註十一、Vgl. Sein und Zeit, 4 Aufl. S. 364.

註十二、従つて個物者存在の可能性たる此の実存的空間が、何故に此の個物を現成せしめて彼の個物を現成せしめないのか、と云つた類の非歴史的反省的思惟による歴史的実存的対象に就いての設問は、総べて無力且つ無意味であり、設問は常に既に余りに遅きに過ぎてゐるのである。Vgl. Kant, Kritik der reinen Vernunft, B, S, 585. Heidegger, Sein und Zeit, 9.
又ライプニツツによつて定式化せられた根拠律 ratio est cur hoc potius existit quam aliud, ratio est cur sic potius existit quam aliter, ratio est cur aliquid Potius existit quam nihil, が、如何に根源的に存在理解 Verstehen によつて基礎附けられてゐるかに関しては、Heidegger, Vom Wesen des Grundes を参照。

註十三、Vgl. Kant, Kritik der reinen Vernunft, B, S, 33.

註十四、Vgl. Sein und Zeit, S, 419.

註十五、a. a. O, S, 364.
猶ほ以下の構成的価値論の展開に関しては「存在と時間」第三章世界の世界性、を参照。此処では価値を得て価値を失ふ、真に具体的なる価値的存在者の存在論的歴史構造が、予備段階的にではあるが全体的に取り扱はれてゐる。

註十六、a. a. O, S, 365.

註十七、Vgl. Vom Wesen des Grundes, 2, Aufl, S, 11～12.

註十八、Vgl. Hegel, Wissenschaft des Logik, Bd, (ed, Lasson), 2, Teil, S, 220.

註十九、生成の無垢に対するディオニュソス的肯定に就いてはニーチェの後期諸著作及び拙稿「ハイデガーに於ける超越の問題」哲学二十八輯、参照、特に此処では

Vgl. Nietzsche, Also sprach Zarathustra, Vorrede, 4.

Vgl. Nitezsche, Wille zum Macht, 1041.

註二十、Vgl. Nietzsche, menschliches Allzumenschliches, Vorrede 1.